

第12回 中野区ゆかりの著作者紹介展示

異彩の作家 香山滋

～古代・浪漫・奇譚～



展示期間 平成27年11月28日(土)～平成28年1月28日(木)

中野区立中央図書館

もくじ

はじめに.....	1
香山滋	2
香山滋あれこれ.....	3
歌人 山田鉦治 / 香山滋の容姿・性格 / 祖父 香山滋	
相関図	6
周辺人物紹介	7
江戸川乱歩 / 城昌幸 / 山村正夫 / 山田風太郎 / 島田一男 / 高木彬光 大坪砂男 / 岡田鯨彦 / 中島河太郎 / 椿八郎 / 千代有三 / 三島由紀夫 竹内博 / 山名文夫 / 田中友幸 [エピソード] 戦後派五人男・香山が活躍した雑誌・ゴジラと香山	
同人界図.....	24
[エピソード] 探偵小説界の騒動	
大和町今昔.....	28
香山滋年譜.....	30
作品年表.....	34
展示風景.....	38
ガラスケース内展示資料.....	39
関係資料リスト	43



はじめに



爬虫類、昆虫、怪獣—異色の題材を携えて突如現れた戦後派新人・香山滋。豊富な動物学の知識を活かして架空の生物を大胆に創造したり、人里離れた秘境を舞台としたり、その強烈な個性は読む者の心を惹きつけました。

自宅は中野区大和町の^{かいまんそう}＜海鰻荘＞。そこで生み出された作品は江戸川乱歩など著名な作家たちとの縁を紡いでいきます。

探偵小説界屈指の人気作家となった香山滋は、田無に転居後、映画「ゴジラ」の生みの親となり、一大ムーブメントを巻き起こします。しかし、彼は「ゴジラ」だけの人ではありません。＜海鰻荘＞の主人はどんな人柄で、どんな人物と交流したのでしょうか。

それでは異彩の作家、香山滋の世界をご紹介します。



かやましげる
香山 滋

明治 37(1904)年 7 月 1 日～昭和 50(1975)2 月 7 日



▲自宅にて愛猫と共に。猫好きという一面がよく現れている。

[写真：個人蔵]

小説家。東京生まれ。本名、山田鉦治^{やまだこうじ}。昭和 23 年 6 月まで大蔵省に勤務。『海鰻荘奇談』^{かいまんそうきだん}により第一回探偵作家クラブ新人賞を受賞。他に『ソロモンの桃』、『怪獣ゴジラ』など幻想、怪奇、秘境ものが多い。享年 70。

昭和 10 年より中野区大和町に居住し、後に自宅を「海鰻荘」と呼ぶようになる。「海鰻荘」の由来は、自著『海鰻荘奇談』による。昭和 21 年、処女作『オラン・ペンデクの復讐』を探偵雑誌『宝石』に投稿、入選。翌年、同作品が『宝石』に掲載され、43 歳で作家デビューを果たす。入選作は山田風太郎や島田一男などを含め 7 編あったが、香山の作品は群を抜いて異色であり、またたくまに注目を集めた。


江戸川乱歩は戦後最も目立つ作家として 5 人の作家の名を挙げ「戦後派五人男」と称したが、香山滋はその中の一人であった。動物学に造詣が深く、その知識を活かした怪奇小説を数多く書いた。乱歩はそれを「動物怪談」と呼び、「戦後に現れた新人中、最も際立った、最も鮮やかな作家である」と評価し、一方で香山も「<江戸川乱歩>という奇怪な作家の作品を文字通り熱愛した」と語っている。「土曜会」などの集まりに積極的に参加し、乱歩や山田風太郎、横溝 正史、高木彬光、島田一男らと酒を飲み歓談した。

東宝から依頼を受け、映画「ゴジラ」の原作を書き上げた。映画は大ヒットを飛ばし、近所の子供たちからは「ゴジラのおじさん」と親しまれた。

また香山は愛猫家で、通いの猫を含め常時2～3匹、多い時で7匹の猫がいた。猫の名は、ホーレンコ、ヨッサフリ、シャーモック、ホーネン、ミイなど。猫が喜ぶお土産を用意したくて、外出すると必ず魚屋で一切れ13円くらいの切り身などを買い求めるのが常だった。香山の膝を猫が我が物顔で占拠しているのはよく見られる光景である。

昭和50年、心不全により、惜しまれつつこの世を去った。

香山滋あれこれ



歌人 やまだこうじ
山田鉀治

文筆家・香山滋のスタートは、歌人として切られたといえる。全集別巻に所収の「香山滋年譜」によれば、香山は、東京府立第四中学校（現在の都立戸山高校）在学中から短歌に親しむようになった。大蔵省に入省後は、機関誌『財政』に多くの短歌を投稿。同誌では、佐佐木信綱により「天・地・人」の3首が選ばれ、選評と共に掲載されていた。香山は昭和12年8月号で「人」に初入選。計3回の入選を果たしたほか、しばしば秀逸、佳作に選ばれた。

以後も歌人活動は、本名「山田鉀治」名義で行われている。実は、佐佐木は『財政』創刊号「選者のことば」において、「作歌するといふことは真面目な藝術にたづさはることであるから、本名でその作品を発表すべきである」と述べており、ひょっとすると、本名での歌人活動には、佐佐木氏の言葉の影響もあつたのではなかろうか。戦後小説を書くにあたり、香山は「大蔵省の官吏をやっていた関係で、どうしても、ペンネームの必要にせまられ」「自分の名前をひねくって」筆名を形づくったといい、寄稿「私のペンネーム」（東京新聞 昭和29年3月21日）において、「つまり、本名「山田鉀（コウ）治」の「鉀」を「香」に、「山」はそのまま、「治」を「滋」に置きかえ、「コウヤマ」では音感が古くさいので「カヤマ」と発音することにひとりぎめした、というだけのカラクリです。」と明かしている。

香山滋の容姿・性格

都筑道夫

私の記憶のなかでは、香山さんはいつも困ったような微笑を浮かべている。

中島河太郎

(香山は)自分の顔を評して、もう少し威厳があると良いと言っているが、渋みがある上に、悠揚迫らぬ大人の風があった。

千代有三

わたしと香山さんの裸身が一番貧弱だったので、二人で湯船の片すみでもじもじしていた記憶がある。

岡田鯨彦

優しい風貌、落ち着きのある静かな話ぶり。平常のお姿は、ごく当たり前の、普通の間人らしい、むしろ地味なお姿に見受けられた。

鷺尾三郎

頭髪を長髪にして、鼈甲縁の眼鏡をかけ、いつも温顔に笑みをたたえていられた香山さんの作家らしい風貌(中略)官吏臭が少しもなかった。誰とも気さくに付き合える円満な性格の人だった。

円谷英二

初対面の印象は、非常に温厚な、好ましい人柄であったことが、とても印象的。ボサボサ髪と柔和な顔、丸い眼鏡の奥の人なつこい瞳など、相手の心をなごませる。

山村正夫

氏は黒ぶちの眼鏡の奥に柔和な目のまたたく、きわめて女性的な感じの強い温和な人柄だった。

松下忠

黒い太めの縁の眼鏡、そのレンズ越しに覗いている柔和な眼、白髪まじりのボサーツとした一種独特のヘアスタイル、小づくりの体、笑うときの表情に、ふと浮ぶ悪戯っ子のような剽軽さと無邪気さ。なにを言っても許してもらえそうな気さくな雰囲気さが身に備わっている。

朝日新聞

温厚で大きな声を好まない。スマートだが小柄。(1954年1月28日「人さまざま」より)

加納一朗

会えばいつもニコニコしながら「やあ」と声をかけられたことも忘れられない。

祖父 香山滋

香山が晩年をすごしたのは現在西東京市の田無。その頃の思い出をご親族に伺った。

「田無の家での香山の定位置は居間の火鉢の脇。そこでいつもニコニコ笑って缶ピースを吸っていた。吸い終わった煙草を火鉢の灰にジュッとやるのが癖だった」

「祖父としての香山は、いたって普通のやさしいおじいちゃんだった。仕事場である四畳半の和室には、ユニの鉛筆がたくさんあり、さらに押し入れにはスクラップブックや本がずらりと並んでいた。その部屋をこっそり覗き見ると、部屋の空気が周りとは違って、重々しく感じられ、異次元の場所のように思えたことが今も記憶に残っている」

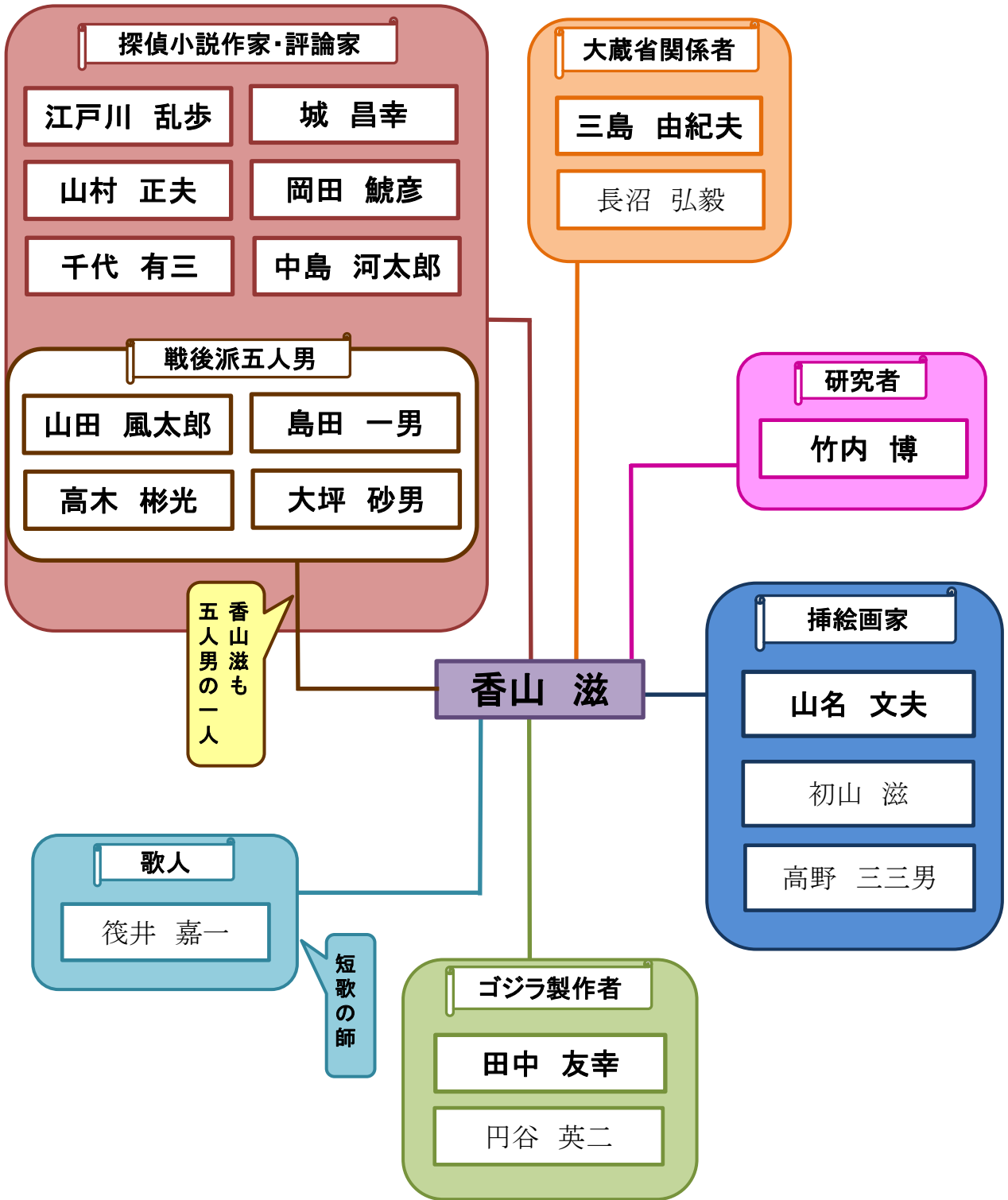
(ご親族のお話より)



◀仕事机の前で火鉢を脇にして

[写真：個人蔵]

香山滋を取り巻く人々



周辺人物紹介



■探偵小説家■

えどがわらんぼ
江戸川乱歩

明治 27(1894)年 10 月 21 日～昭和 40(1965)年 7 月 28 日

推理作家。三重県出身。大正 12 年に処女作『二銭銅貨』を発表。以後作家として活動し、多くの作品が映画化された。日本推理作家協会初代理事長を務め、昭和 36 年には紫綬褒章を授与される。代表作に『怪人二十面相』『パノラマ島奇譚』『陰獣』など。享年 70。

昭和 11 年には『怪人二十面相』などの作品を生み出し、著名作家になっていた乱歩だが、戦争が始まると、旧作品『芋虫』が反戦作品だと指摘され、作品が発禁同然となってしまう。戦前の乱歩は「我儘な人嫌いで、孤独を愛し、孤独の放浪を愛し」という性格だったが、戦争が始まってから防空郡長や町会の副会長に就任し、仕事をこなすようになると、人嫌いが克服される。後に「会嫌い人嫌いの性格の持主という過去のゴシップが、根も葉もない伝説であったとしかおもえなかったほど、正反対の社交好きで人づき合いのいい人物であった」と山村正夫は振りかえる。

『宝石』の選考委員だった乱歩は「(前略)プロットにも少し行きすぎの点があり、文章も必ずしもおとなではない。それにも拘らず私はこの作者に大いに期待をかけている」と、香山の将来に期待し牽引していった。同好会での交流も多く、香山が昭和 2 3 年に記した日記には新人歓迎会の記述があり、「先生(乱歩)は始終ニコニコしていられて、どんな話題が飛び出しても一向平気で相手になられる。若い人達と話し合うのがとても楽しそうだった」と記してある。この後香山は脳貧血で倒れ、乱歩の家に泊まっている。

作家生活を振り返った香山は、「20 有余年の官吏生活から足を洗って、いっきに飛び込んだ作家生活も、入ってみればこれほど恐ろしく悩みの多い荆棘の道であるとは、思いもよらなかった」と語る。そんな香山が小説を書き続けるのは乱歩に対して「恩返ししたい」気持ちがある為で、乱歩に格別な尊敬の念をもっていた。

じょうまさゆき
城昌幸

明治 37(1904)年 6 月 10 日～昭和 51(1976)年 11 月 27 日

探偵作家・詩人。東京都神田出身。詩人としての名前は城左門。昭和 21 年に岩谷満いわやみつるや武田武彦たけだたけひこと共に探偵小説専門誌『宝石』を創刊。代表作は『槿花戯書』『死者の殺人』はちすざれがき『若さま侍捕物手帖』など。享年 72。

城は、香山がデビューするきっかけとなった『宝石』第一回懸賞探偵小説募集の選者のうちの 1 人。「当選作の中で最も特徴のある作品は香山滋君のものであった」と評価した。そんな城について香山は「あまりの人なつっこさに、私は時折甘えすぎて、ずいぶん御無礼やわがまを働く」と語っている。

香山は初めて城の作品を読んだ時の感想を「ぼくが、ひそかに夢み、そして、誰に話してみても共感してもらえそうもない『心の不思議さ』というものが、文字に依って、こうも的確に表現できるものであることを、脅威の思いで知らされた」とし、後年怪奇ロマンの筆を執らせた遠因が、この時に発生したものとしている。乱歩が城の作品について「(前略)彼は探偵小説を一つも書いていない。探偵小説の親類筋にあたる怪奇と幻想の文学のみによって、われわれの仲間入りをしているのだとあっていい」と評しているところを考えれば、「幻想怪奇の詩」と表現される香山の作風は、城に拠る所が多いのかもしれない。

作家の南沢十七みなみさわじゅうしちは酒を呑んだ城のことを「いくら酔ってもあの人は乱れない。いかにも武士のような格調たかい呑み方でした」と振り返っている。一方、香山は城と骨董屋に二人で出かけた時に、説明を受けながら「おもわずお父さんと呼んでみたくなった」と語って



▲詩人・作家の城昌幸と [写真：個人蔵]

いる。実は香山は「先輩作家である城水谷準みずたにじゅんと同じ年では失礼にあたるのではないかと思い、実際の年齢より 5 歳若く伝えていた」と、後に竹内博たけうちひろしに語っているように、城とは同い年に当たる。同年の香山に父と慕われるほど、城には堂々とした風格があったのだろう。

やまむらまさお
山村 正夫

昭和6(1931)年3月15日～平成11(1999)11月19日

小説家。大阪生まれ。昭和24年2月、18歳のとき「宝石」に『二重密室の謎』を発表。作風は本格推理小説中心。代表作に『獅子』『天使』などのほかに『推理文壇戦後史』がある。享年69。

昭和27年、香山^{やまだふうたろう}滋、山田風太郎^{しまだかずお}、島田一男らが、本格推理小説の同人誌『鬼』を創刊。『鬼』は同人が当番制で編集しており、山村はその手伝いをしていた。二人のつき合いは、香山が編集当番の時に、山村が中野区大和町の香山宅を訪ねたことで始まる。それ以降、「^{かいまんそう}海鰻荘」と名付けた自宅に招かれ話をして、夕方になると奥さん手作りのカレーをご馳走になることがあった。

香山は、山村が当初想像していた官僚や学者のような気難しい人物ではなく、実際は柔和な目をした温和な人柄だった。山村は「同人の中で一番家族的に接してくれたのは香山さん。父親のように甘えられる存在だった」と語っている。

香山の書斎は、「いわゆる作家の書斎という感じではなかった」と山村は言う。原稿は座り机で書く。廊下には籐椅子とテーブル、金魚が泳ぐ大きな水槽が置いてあり、疲れた時はそこで休んだ。裏の物干台には香山手製の流し台があって、飲み残しのビールなどが流せるようになっている。本棚はなく、代わりに押入れに蔵書がズラッと並んでいた。

山村は香山の蔵書の一つ、ゴーチェの『木乃伊^{ミイラ}物語』を「ぜひ読んだほうがいい」と勧められ、借りたことがあった。後に譲って欲しいと頼んだが、香山にとって何度も読み返すほどの愛読書だったため、さすがに断られた。

山村は香山の死後、『香山滋全集』の編集に関わっている。それに際して「戦後派五人男と言われる作家の中でも、香山さんには特別お世話になった。恩人の作品を再び世に出す仕事に、自分が携われるというのは光栄だし、嬉しいことだと思っています」と語っている。

◆戦後派五人男◆

昭和 22 年に行われた第一回『宝石』懸賞小説でデビューした香山滋、山田風太郎、
島田一男の 3 人(他にも飛鳥高、鬼怒川浩、独多甚九、岩田賛の 4 人の入選者がお
り、全体で 7 人いた)に加え、翌 23 年に江戸川乱歩の推薦文付きの『刺青殺人事件』
を刊行した高木彬光、佐藤春夫の推薦を受けデビューし『天狗』で注目を集めた大坪
砂男を合わせて、江戸川乱歩が「戦後派五人男」と命名した。探偵小説の戦後派新人
の出色の作家 5 人であり、第一線の花形として活躍することになった。

やまだふうたろう
山田風太郎

大正 11(1922)年 1 月 4 日～平成 13 年(2001)年 7 月 28 日

小説家。兵庫県出身。父は医者で、医学生を続けながら学費・本代を稼ぐために懸賞小説
に応募する。推理小説でデビューするが、他にも時代物やノンフィクション、エッセイなど
幅広く手掛ける。代表作は『眼中の悪魔』『甲賀忍法帖』『明治断頭台』など。享年 79。

香山と山田は小説家として同時期にデビューを果たし、「新宿青線時代」と呼ばれた時
代から交流を深め、本格派擁護を掲げた同人雑誌『鬼』でも共に活動している。交流を知る
一端として年賀状があるが、そのやりとりの中で、山田はクジつき年賀はがきを香山に送っ
ている。その際に「当たったら半分ですぞ」という言葉を書いており、互いの気安さが伺え
る。

2 人はともに酒が好きであった。香山は酒の飲めない大坪砂男に対して「この味が分らな
いとしたら、君はいったい何を楽しみに小説を書いているんだろう」と、言う位には酒が好
きで、中島河太郎によれば酒が入ると露出症的な面があったようだ。一方山田も「ビールと
ウイスキーのちゃんぽんで前後不覚」「気がつけば渋谷駅前の広場の中へ落ちていた」など
日記には必ずといって良いほど酒の記述が出てくる。香山も中島河太郎に言わせれば露出症
的な面があったようだ。そういった二人であるからか交流も頻繁で、山田の日記に「午後よ
り中野区大和町、香山邸にて酒宴」と出てくる。内容はさすがに「探偵小説芸術論、非芸術

論の論議かまびすし」となっている。

一時期探偵小説界を騒がせた魔童子論争だが、魔童子という匿名を使い、文学派の大坪と討論した人物は高木彬光と山田だった。乱歩に「闘志はさかん」と評価される、本格派擁護の山田の性格が分るようなエピソードだ。香山は「鬼クラブ」に籍を置いていたものの、自身は「本格派にも文学派にも属さず」とし、二派の争いには関与していなかった。

また、のちに「香山風太郎」という作家が出てきた時に、二人の共著なのでは、と噂をされたが、香山と山田は「共著ではない」という共同声明を載せている。この香山風太郎は探偵小説家の^{しまもとほる お}島本春雄で、二人の特色を混ぜたものが書きたかったのだと後日語った。

しまだかずお
島田一男

明治40(1907)年5月15日～平成8(1996)年6月16日

記者・小説家・脚本家。京都市出身。明治大学を中退。満洲で成長し、昭和7年には「満洲日報」記者となり、終戦まで長く勤めた。帰国してから宝石に応募した「殺人演出」で作家デビューを果たす。代表作は『社会部記者』、脚本に『事件記者』など。享年89。

島田は無類の猫好きで、その噂を聞いた近所の人が島田の家に猫を捨てていくのでその数は増えるばかり。山村正夫は「^{しんしょうふみこ}新章 文子 氏や^{いしざわえいたろう}石沢 栄 太郎 氏、それに故香山滋氏なども探偵文壇きっての猫好きとして知られているが、数の上ではとうてい島田氏の家にはかなわないのに違いない」と記しており、書齋を我が物顔で闊歩していても平気であった。また、執筆する際には必ず先の丸くなった鉛筆と決めており、トンボ鉛筆の会社に頼み、わざわざ特別製の黄色い丸鉛筆をあつらえて使っていたようだ。

香山宛の年賀状には「大いに語り大いに遊びたい」と記されており、お互いの気安さが伝わってくる。島田は追悼文で、「デビューしてから二十数年の付き合いがあるが、二人きりで話し合ったのは数回、しかもいずれも暗い思い出として印象に残っている」と語った。「大の人情家で世話好きだった」と山村が評価している島田に、香山は節目ごとに人生相談をしていたようだ。立派な体躯の持ち主だが酒を一滴も飲めなかったと云われる島田は、聞き役に徹していたのだろうか。

香山は「夢がなくなっちゃったの。いまの世の中みていると、うんざりしちゃうんだ。夢が

ないだろう、日本人に。おれの夢も消えちゃった。もう書けないよ」とこぼしていた。島田は文章を「わたしは香山滋を偉大な大人の童話作家と思っている。そして、彼に筆を絶たせたのは、即物的な今日の社会だと考えている。香山君は夢を食って生きてきたのである」と結んでいる。

たかぎあきみつ
高木彬光

大正 9(1920)年 9 月 25 日～平成 7(1995)9 月 9 日

小説家。青森生まれ。飛行機の技師になるが、敗戦により職を失う。

職を得るため探偵小説作家を志し、処女作『刺青 殺人事件』^{しせい}をわずか三週間で書き上げたが、藁半紙にかかれた無名新人の原稿を受け入れてくれる出版社などあるはずもない。途方に暮れて占い師に見てもらおうと、「大家に原稿を送ればたちまち認められる」と言われ、原稿を江戸川乱歩に送った。結果は、占い師の言うとおりであった。昭和 23 年乱歩の提案で『宝石選集』の第一集として刊行され、売上げは最終的に 3 万部に達した。昭和 25 年、『能面殺人事件』で探偵作家クラブ賞を受賞。享年 75。

高木は次々と雑誌『宝石』に作品を発表し、香山と同じく「戦後派五人男」の一人となる。作風は香山の空想科学小説とは対照的で、「謎と論理の本道を行く正統派の本格探偵小説」であった。

昭和 25 年、高木と大坪砂男の仲が決定的にこじれる事件が起こった。当時、探偵文壇は「探偵小説芸術論」をめぐる、本格派と文学派の二派が論争をしていた。ある日、文学派中心の「抜打座談会」の席で文学派が本格派を否定する発言をし、この模様が雑誌『新青年』に載った。これを見た本格派は猛反発。本格派であった高木は、文学派の中でも大坪砂男の発言に激怒し、自宅にあった大坪の著作を一冊残らず風呂のかまどで燃やしてしまうなど、気性が激しく熱血漢な一面を覗かせた。この一件に大いに刺激された高木は、香山滋、島田一男、山田風太郎らを迎えて本格派擁護の「鬼クラブ」を結成、同人誌『鬼』を創刊した。

おおつほすなお
大坪 砂男

明治 37(1940)年 2月 1日～昭和 40(1965)1月 12日

小説家。東京生まれ。元、警視庁刑事部鑑識課。佐藤 春夫さとうはるおの推薦により、昭和 23 年『天狗』でデビュー。ペンネームの由来はホフマンの『砂男』すなおとこより。昭和 24 年、『私刑』リンチで探偵作家クラブ賞を受賞。享年 61。

大坪は、香山らとともに「戦後派五人男」の一人に数えられる。その文体は推敲を重ねた凝ったもので、大変な寡作家であった。そのせいか筆が速い上に、独特な世界観を描く香山に驚嘆していた。香山が元役人であることに触れ、「人間の運命には転換期があるらしい。ひとたび才能を発揮してしまえば、動物怪談などと呼ばれる一連の特異な香山文学を築き上げてしまうのだ」と語っている。

探偵小説観は「文学派」だった。「本格派」との対立を深めた「抜打座談会」の参加者の一人であり、特に本格派の高木彬光を激怒させ、犬猿の仲となる。探偵作家クラブで幹事長を務めていた時代もあるが、不祥事が発覚、探偵小説界を追われた。後に高木が当時のことを回想し、「性格破産者」と大坪を強く非難している。しかし大坪が残した作品については「珠玉の名編もある」と認めている。

「金に困って自分の金歯を抜いて売った」などのエピソードも多く存在する。しかし山村正夫は、「大坪の創作だったのでは」と半信半疑で、「読者を欺く探偵小説作家には必要な才能だが、大坪氏には天性の詐欺師の才が備わっているのではないか」と語っている。

他にも三畳一間での極貧生活や、代筆者の存在を噂されるなど、波乱万丈な人生を送っていた。晩年は一切創作から遠ざかり、最後の作品が発表されたのは昭和 34 年のことである。

昭和 40 年 1 月、肝硬変と胃癌のため死去。入院してから、苦痛に襲われながらも一切の治療を拒否し、日夜座禅を組んでいたという。

おかだしやちひこ
岡田鯨彦

明治 40(1907)年 12 月 19 日～平成 5(1993)年 8 月 4 日

大学教授・小説家。東京出身。昭和 13 年、東京帝国大文学科卒業、各学校を歴任して、昭和 24 年、東京学芸大学教授となる。46 年には定年退職して聖徳学園短大教授となった。代表作は『妖鬼の呪言』『噴火口上の殺人』『薫大将と匂の宮』など。享年 85。

容姿は「眼鏡をかけた風貌が理智的」で、「探偵作家というより大学の教授のよう」「若々しい風貌」だったという岡田は、随筆の中で自分のことを「エーパン」と呼んでいた。これは美男俳優の岡田時彦がエーパンと呼ばれていたことに因んでいたという、ユーモラスな面を持つ人物だった。また、新宿区牛込余丁町にある島田一男の家のすぐ近くに住んでおり、二人は仲が良かったようだ。

本格派と文学派の対立を深刻化させたきっかけとして有名になった抜打座談会で、岡田は本格派唯一の参加者であった。この後に、本格派擁護を掲げて発刊された同人雑誌『鬼』の同人になった。『鬼』には香山も所属していたので、お互いに交流を深めた。

作家としては、香山がデビューした 2、3 年後に『宝石』で執筆するようになり、香山の作品について「宝石には、ほとんど毎月のように作品がのった。いつも巻頭に、香山さんの小説だけカラー版で、白い上等な紙で掲載されるのであった」「香山さんの筆はまことに優れた魅力あるもの」「何という恐ろしい筆力であろう」と評価した。香山自身についても、「いつも長兄らしい風格をもって私たちに指導してくださる趣があった」と語り、また、酒宴で余興に香山が寿限無とガマの油の口上をやった事についても「記憶力に自信があったのかもしれないが、律儀な面ももっておられた、ということであろう」と語っている。

なかじまかわたろう
中島河太郎

大正6(1917)年6月5日～平成11(1999)年5月5日

文芸評論家・推理小説研究家。鹿児島県出身。和洋女子大学名誉教授、初代ミステリー文学資料館館長。推理小説の発展に貢献した。若い頃は柳田国男やなぎだくにおに民俗学を学ぶ。柳田国男まさむねはくちょうや正宗白鳥の研究など、探偵小説研究以外でも高く評価された。著書に『探偵小説辞典』『日本推理小説史』など。享年81。

中島の兄が日本探偵小説の草創期の雑誌を創刊号から揃えていたので、中学生のときから探偵小説の「熱烈なファン」になった。戦後高校教師の傍ら『探偵新聞』に連載した「推理小説略史」が乱歩の目に留まり、本格的な評論の道にすすむ。中島は江戸川乱歩賞と推理作家協会賞をダブル受賞しており、評論・研究活動でその2つの賞を受賞したのは中島一人である。

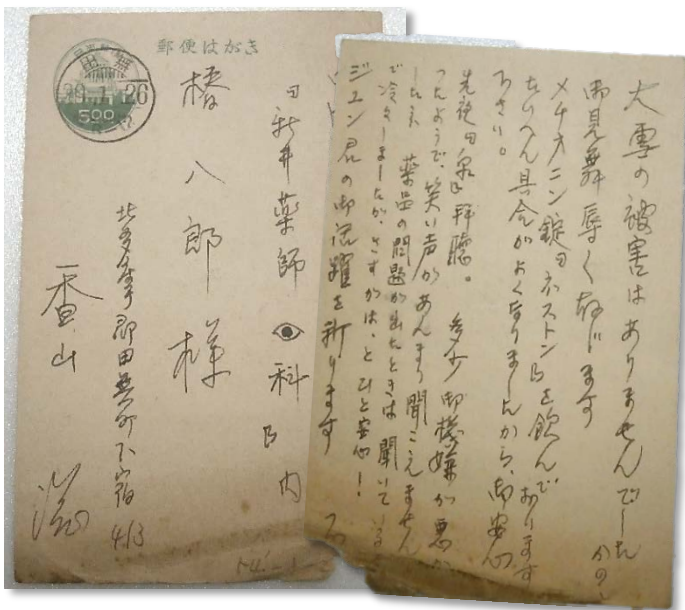
乱歩賞について意見を求められた中島は、「既成作家と新人を問わず、書き下し長編を募集して、その最高作に贈っては」という案をだした。この案を第3回から起用した所、多くのメディアがとりあげ、優秀な作家も多く輩出される賞となった。乱歩は「中島案は見事に成功したのである」と評価した。また若手作家の面倒見もよく、中島の性格について作家の逢坂剛おうさかごうは「十のうち一つ良いところがあれば、それをほめた」と語っている。

中島は「香山滋は戦後の探偵小説界の輝かしい新星であった」と評価しており、香山とは「探偵文壇に登場して間もなくからの顔馴染み」であった。しかし晩年は疎遠になり、「昨年入院され、誰とも会いたがらなかったこともはじめて聞いたし、行年七十歳で、齢を五つも若くいっておられたことも、また片足を切断されたことも知って、意外なことばかりであった」と振り返る。中島が晩年知人に宛てた年賀状には「ミステリーのみりよくにいたくおぼれける／わがいっしょうにくいなかりしか」としたためられており、香山を始め多くの探偵小説家を評価し、支える存在であった。

つばきはちろう
椿八郎

明治33(1900)年4月18日～昭和60(1985)1月27日

作家・眼科医。本名 ^{ふじもりあきら} 藤森 章。大学在学中に創作活動を開始、『宝石』1949年3月号に「カメレオン黄金虫」が掲載される。佐藤春夫の実録短篇「火眼記」に登場するF氏は、椿がモデル。探偵作家クラブ所属。享年85。香山も所属していた当クラブの会員章「ポーの指輪」は、椿の発案である。一つずつ会員番号が刻印してあり、香山は7番であった。椿の指輪に対する思い入れは非常に強く、一度は流れた会員バッジの話が再燃するや、「以前のゆきがりもあり黙っているわけにもゆかず」「再び指輪説をかつぎ出し」ついに採用された。椿は、潰瘍で入院中の大下宇陀児の分を特別に早く作らせ病床に届け、「この指輪の効験はまことにあらたかで、大下氏が、これをはめられてから、回復が非常にはやくなり」と当時の会報に記している。奇しくも、香山も同時期に潰瘍を患って入院していた（香山はその前年にも肝臓を悪くし、入院したばかりであった）。椿は後の会報でも指輪に触れ、「香山氏のラッキー七番は、あの大病を克服するに大いに役立ち」と述べている。椿の還暦にあたっては、香山も会報に祝辞を寄せており、椿には「どこか日本人離れのした、言うなればゲルマン民族的風貌がある」と評し、ドイツ語で乾杯の辞を捧げている。香山は大学で、内田百閒にドイツ語の講義を受けていた。



◀香山から椿への書簡 [個人蔵]

ちよゆうぞう
千代 有三

明治 45(1912)年 1 月 28 日～昭和 61(1986)年 12 月 24 日

俳人・推理作家。本名 ^{すずきゆきお}鈴木 幸夫。大阪府出身。跡見学園短期大学学長、早稲田大学名誉教授。容姿は「ほっそりとスマートな体格に優面の、ちょっと見には俳優と見間違えるくらいのなかなかの好男子」だった。著書に『現代英米文学の意匠』『痴人の宴』などがある。享年 74。

香山や千代が参加していた探偵作家クラブでは、年頭に「犯人当てゲーム」を行っていた。出題者の作品を朗読し、参加者が犯人を当てるゲームだが、千代は二年続けて一等をとった。このときの出題者は2回とも高木彬光。高木にとっては自信作であった。3回目には出題者を千代に交代して行われたが、その時も高木は一等になることができず、悔しさを「トリ損ないもの」という題名で『探偵作家クラブ会報』に載せている。

また、純文学の同人雑誌『文学者』の会合に山村正夫が出席した時のこと。千代は本名の鈴木幸夫の方で出席しており、山村の目には「別人のように気難しく厳しい人物」として映った。のちに千代が「大学にいるときや文学者の会合のときは鈴木幸夫で、それ以外のときが千代さん。人間もがらりと変わってしまうんだ」と語ったように、「本名とペンネームの使いわけによって人間も変わるというあたりが、いかにも氏らしかった」と山村は感想を述べている。

千代と香山の個人的な交流が始まったのは、「十人会」で一緒になってから。作家としての香山を「世界はじめての独創の奇才というほかはなく、珍重すべき作家であったわけである」と評価し、「新宿青線時代」の印象を「いくらか無口ながら横坐りにニコニコして、われわれの ^{らっかるうぜき}落花狼藉ぶりを眺めていたものである」と語っている。晩年の香山については「香山さんは本当は淋しがりやであったかもしれない。晩年求めて人を避けた様子があるのは、自分なりの孤独を楽しむためであったかもしれない」と偲んだ。

◆香山が活躍した雑誌◆



『宝石』昭和24年12月号(左)、昭和31年7月号(右) 【ミステリー文学資料館蔵】

『宝石』は、岩谷書店を起こした ^{い わ や み つ る} 岩谷 満 が、詩人仲間であった城昌幸に相談をもちかけ、昭和21年4月に創刊した探偵小説雑誌である。城が「美と秘密と物語性」をもつ宝石には「探偵小説の雰囲気と同じ性質」があると考え、誌名を『宝石』と名づけた。1号5万部、2号6万部という売れ行きをみせ、創刊3周年を迎えた時には、賞金総額100万円という規模の「百万円コンクール」「百万円懸賞」とも呼ばれる探偵小説募集を行

うなど、探偵小説界をリードする雑誌であった。山村正夫曰く、『宝石』は「作家にとっても存分に筆のふるえるホームグラウンドであり、実験劇場の舞台」「営業誌でありながら実質的には同人誌的な色彩の強い異色の雑誌」であった。

香山は『宝石』第一回懸賞探偵小説の当選者だったが、選者の江戸川乱歩は当時のことを「当選者に社に集まってもらったり、小料理屋に招待したりして、われわれ選者も出席し、これを激励し、先輩作家としての体験談を話したりしたものである」と振り返る。しかしその後は経営不審で、「その当選作家を遇することが甚だ冷淡で、第一回当選者のような具合にはいかなくなってきた」「第一回当選の作家たちに、優れた人が多かったということも、むろんあるけれども、その激励を怠っては、出るべき作家も出ないで終わる」と自著で警告した。

また、『宝石』がつぶれもしないで命脈を保ってきたのは、探偵作家一同が、中心雑誌である『宝石』を守るという気持ちから、多大の金銭上の損害を忍びに忍んで、執筆を続けてきたからで、こういうふうに作家が一体となって、一雑誌を庇護した例は、ほかの分野にはまったく見られないことである」と語っており、香山の活躍した時代の探偵小説作家たちの雰囲気が伝わるようである。

19年間『宝石』に寄稿し活躍していた香山だが、同誌の終刊と共に筆が鈍くなってしまった。後日「私は私なりの努力の限界を宝石に捧げつくした」と記している。

■その他の人々■

みしま ゆき お
三島 由紀夫

大正 14(1925)年 1 月 14 日～昭和 45(1970)年 11 月 25 日

小説家、劇作家。東京出身。東京大学卒業と同時に大蔵省に勤務。その後創作活動に専念するために退職。小説、戯曲、評論の様々な分野で活躍したが、自衛隊駐屯所で演説したのち自決。享年 45 歳。代表作は『仮面の告白』『金閣寺』『潮騒』など。

香山は三島について「三島由紀夫さんとは、在職当時、昼休みに二三度お話したことがあるが、私とは全然方面が違うし、当代随一の若手流行作家にのし上ってしまったので、その後絶えて御無音に過ごしている（以下略）」と語った。三島の方も、大蔵省に勤めていたときに来た文藝春秋のインタビューに「ウチには私より有名な香山さんという作家がいますから」と答えていたという。また、香山は「これは私だけの腹案であるが、大蔵省出身の変り種三人男で、連作をやってみたら、面白かろうと考えている。三島由紀夫さんが発端篇を、私が展開篇を、そして長沼弘毅ながぬまこうきさんに解決篇をお願いする」と記しており、お互いに認め合っていた様子がうかがえる。

香山が原作を担当した映画『ゴジラ』についても、三島は雑誌で「ゴジラには高い社会性がある」と大いに評価した。まだ封切りして間もない昭和 29(1954)年 11 月 3 日の朝日新聞には『企画だけの面白さ「ゴジラ」東宝』という見出しで「(前略) 日本のは科学映画的なものに乏しい。かといって、空想的なおもしろさもない」という内容の記事が載っている。当時のジャーナリズム全体が『ゴジラ』に対する評価は決して高いとは言えなかった。その空気の中で三島が評価したことについて、『ゴジラ』のプロデューサーだった田中友幸たなかともゆきは「ゴジラシリーズを撮り続けた私たちの、大きな励みになりました」と語っている。

たけうちひろし
竹内 博

昭和 30(1955)年 8 月 15 日～平成 23(2011)6 月 27 日

特撮映画研究家、日本推理作家協会会員。著書に『ゴジラ 1954』、『円谷英二の映像世界』、『写真集特技監督円谷英二』がある。享年 55。

竹内は、『妖蝶記』^{ようちょうき}を読んで香山の大ファンになる。時代は怪獣ブーム。ゴジラの作者だからという軽い気持ちで読み始めたが、「面白いのなんの、いっぺんでファンになってしまった」という。

小学校 5 年の時に、サインを貰いに香山宅を訪ねたのが初めての出会いだった。17 歳の頃には出入りを許されるようになり、「天にも昇る気持ちだった」と語っている。竹内が香山の本を集めていると言うと、『オラン・ペンデク奇談』や『怪獣ゴジラ』をプレゼントされたという。これは香山が亡くなる 2 年前（昭和 48 年）のことで、この頃の香山は人に会いたがらなかったため、つき合いがあったのは竹内だけであった。

熱心に香山の作品を集め、集めた掲載誌は 880 冊ほど。『妖蝶記』の生原稿も竹内の手に渡った。香山は、出版社から返却された原稿をすぐに燃やして処分してしまっていたらしく、たまたま残っていたのは奇跡的なことであった。

この頃の香山は田無に住んでい

た。書斎は四畳半で、書棚には

うちだひやっけん たねださんとうか
内田百閒の全集や種田山頭火、
さいとうもきち おぐりむしたろう
斎藤茂吉、小栗虫太郎の作品が並

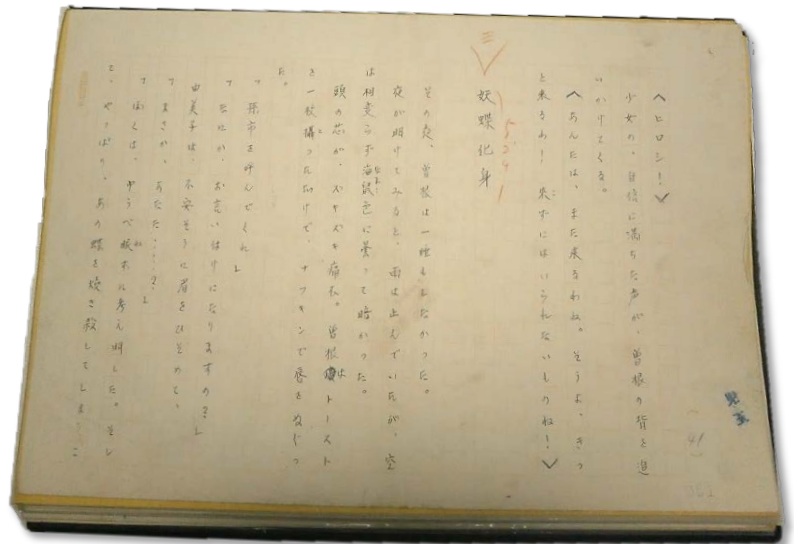
んでおり、虫太郎の『

こくしかんさつじんじけん
黒死館殺人事件』は初版本を持っ
ていた。

香山の死後、竹内は全集の編集に
尽力し、5 年かかって『香山滋全集』

（全 14 巻、別巻 1）を作り上げた。中
でも「香山滋書誌」は、国会図書館や

文学館などを調べあげて作られている。竹内によれば、完璧な書誌ではなく、少年ものを中



▲『妖蝶記』直筆原稿

【ミステリー文学資料館蔵】

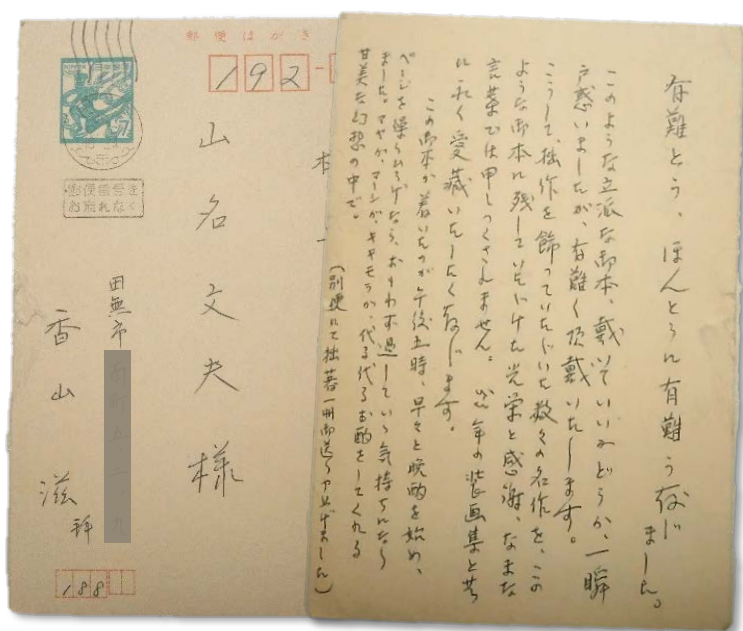
心に抜けがあるという。それでも著書だけでなく、短歌や映像化された作品の目録までもが収録された圧巻の書誌である。

やまなあやお
山名 文夫

明治 30(1897)年 3 月 17 日～昭和 55(1980)年 1 月 14 日

イラストレーター。和歌山県生まれ。大正 6 年、洋画研究所で油絵を学ぶ。商業デザインを勉強、雑誌の挿絵などを担当した。昭和 4 年、資生堂に入社。商標の「花椿」のデザインに関わった。享年 83 歳。

山名は、香山作品の挿絵や装丁を多く手がけた。初期の頃は香山作品の担当画家になったかのように、「香山さんのファンタジーとエロティシズムを可視化することが、この上もなく楽しかった」と語っている。一方の香山は、「僕の作と山名文夫画伯の挿絵とは、完全なマッチを見せてくれる」「作品のイメージを昂揚して下さった」と感謝している。『ソロモンの桃』が雑誌『宝石』に連載されていた当時は、山名の挿絵が効果をあげ、評判になった。山名と香山は理想のコンビだったと言える。



◀香山より山名文夫への書簡
[個人蔵]

たなかともゆき
田中友幸

明治 43(1910)年 4 月 26 日～平成 9(1997)年 4 月 2 日

大阪生まれ。昭和 15 年、大宝映画に入社。昭和 19 年、東京撮影所に移籍し、文芸部を経てプロデューサーとなった。映画「ゴジラ」「モスラ」「日本沈没」などの名作をプロデュースしている。享年 87。

昭和 29 年、「水爆の影響で海底に眠る怪獣が目を覚まし、異常発達して日本を襲う」という原案が作られた。しかしストーリー展開がうまくいかず、当時、怪奇幻想小説のジャンルで人気があった香山滋に原作の執筆を依頼することになった。田中自身が香山のファンであり、香山の元を自ら訪ねて行ったという。香山が承諾すると、田中は「にんまりほほえんで」帰って行った。映画は大ヒットし、東宝内には「第一回のゴジラが一番面白かった」という批評が残っている。

◆ゴジラと香山◆

東宝のプロデューサー、田中友幸から映画「ゴジラ」の原作執筆を依頼されたのは、昭和 29 年のこと。当時、香山は幻想・怪奇物作家として人気があり、古代生物の知識が豊富だった。「水爆を象徴する大怪物を暴れさせたい」という依頼に「さすがのものおじしない僕もたじたじとならざるを得なかった」が、最終的に乗り気になって承諾すると、田中氏はにんまりほほえんで帰って行った。

同年 11 月に「ゴジラ」は封切られ、大ヒット映画となる。ゴジラは原水爆を象徴した恐ろしい怪物であるにも関わらず、どことなく愛嬌があった。そのため観客は怖がるどころか親近感を覚え、原作者の思惑と違った結果になった。香山自身もゴジラが可愛くなりはじめ、「これ以上、奇妙な薬品で溶かしたり責めたりする筋を書くのが心苦しく」なり、2 作目となった「ゴジラの逆襲」を最後に、「もう続編は書かない」と固く決心した。

ゴジラの原作者として有名になる一方で、何を書いても「ゴジラの香山」がつきまとうことに葛藤していた。「もうゴジラとは縁を切りたい」「ゴジラを持ち出さなければ書くことがないというのなら、そっとしておいて欲しい」と複雑な心中を漏らしている。

映画会社から「怪獣物を書け」と言われ、作家仲間の島田一男に愚痴をこぼすと、「書き

なよ、じゃんじゃん。稼ぐんだなァ」などと茶化された。これに対して香山は「おれ、おこるよ。まじめに、今後小説が書けるか悩んでるんだから」と返した。とはいえ、ゴジラを憎んでいるわけではない。香山はエッセイの中で、次のように語っている。

「ぼくは決して、『ゴジラ』よ、おまえを憎んではない。おまえを愛していることに変わりはない。『ゴジラ』の霊よ、安らかに北海の果てに眠れよかし。合掌」



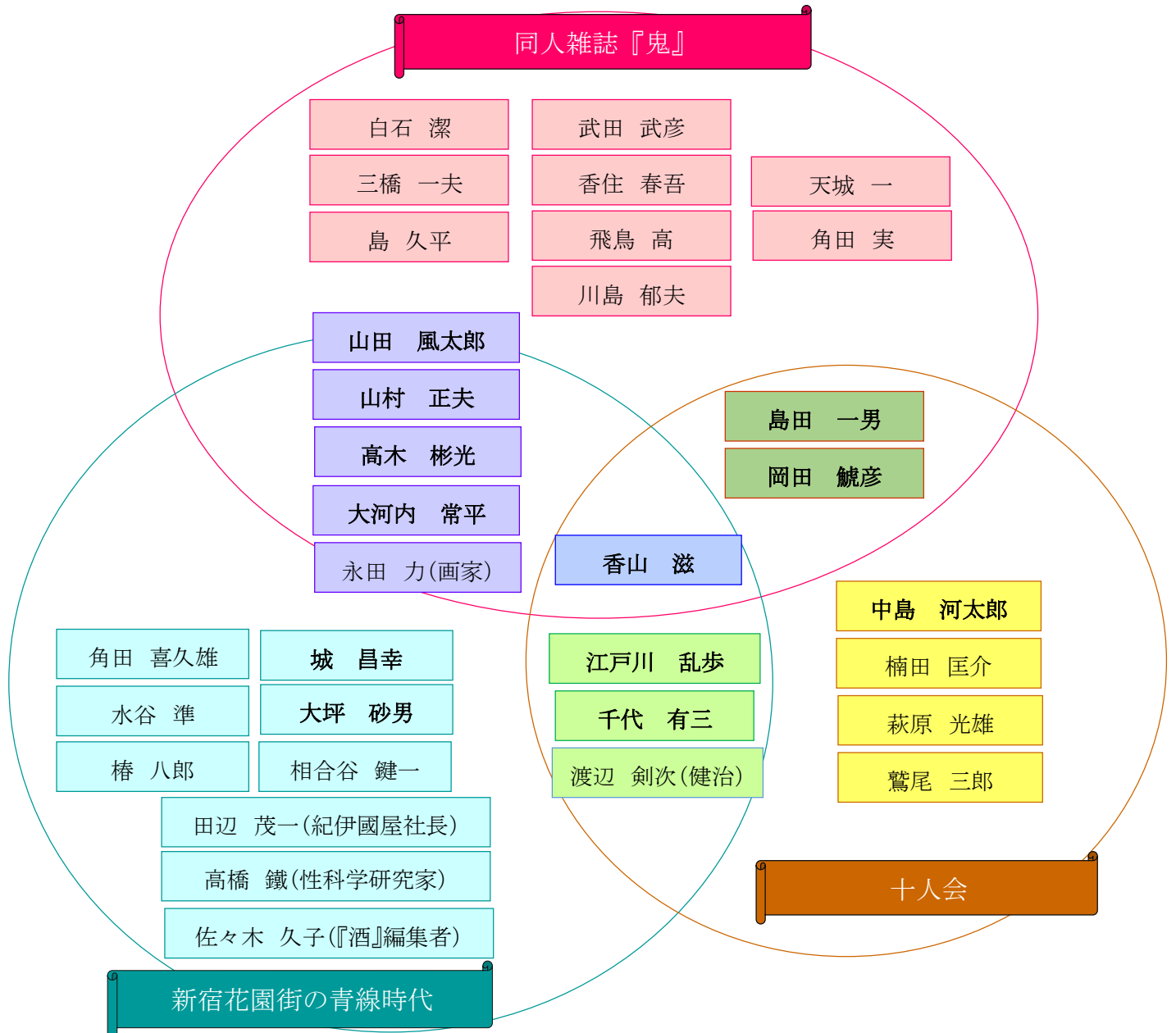
▲昭和 29 年 10 月 25 日 東宝撮影所にて

ゴジラ完成記念「ゴジラ祭り」にて奉納する田中友幸（手前）と香山滋（奥）

[写真：個人蔵]

香山滋と同人会

山村正夫が、当時の探偵小説界について「探偵小説を不良の読物とみなす一般の蔑視偏見は戦前だけでなく、戦後もまだ根強く残っていたからにはほかならない。(中略) そのような時代だっただけに、作家も一匹狼では通せず、お互いに手をつないで力を貸し合う必要があった」と振り返っている。そうした時代の中で沢山の同好会が発足した。



十人会

千代によれば「どうやって発足されたのか記憶にないが、江戸川乱歩先生をはじめ、会員の宅を廻り持ちに月一で集まった」会であり、十人連作で「殺人階段」という作品も書いた。しかしこれは、最後を書く島田が「どんな事件でも必ず解決させる」と言った為に犯人も決めておらず、事件が複雑になり過ぎてお流れになった。香山はその連作の発端を書いた様だ。また、島田の肝いりで香山を含め、修繕寺に7人で一泊旅行に出かけたりもしている。

同人雑誌『鬼』

1950年（昭25）「新青年」に掲載された木々高太郎主宰の文学派座談会「抜き打ち座談会」に触発され本格派擁護のために鬼クラブを結成。高木彬光が主体となって同人雑誌『鬼』を創刊する。しかし後年「半数は本格派でないところに、なにかしら無理が感じられた」と乱歩は語っている。

新宿花園街の青線時代

昭和27年頃から30年頃にかけてのこと。「新宿の歓楽街に住む探偵作家の朝山蜻一^{せいいち}の家に、夜入り浸り、入りきらなくなったら外の歓楽街へ出て、売春婦相手に痛飲する状態がほぼ毎日続いた」という時に一緒に過ごした仲間。いかがわしい事が目的ではなく、ただ女性にお酌をしてもらう事が楽しかった、と山村正夫は振り返っている。

※上記のほかに土曜会や、香山は所属していないが青酸カリグループなど様々な同好会が存在していた。

青酸カリグループ

当時の探偵作家クラブ内にできた私的な集まりで、阿部主計、二宮栄三、渡辺健治（剣次）、中島河太郎、萩原光雄、古沢仁、などの評論家の諸氏に楠田氏が加わって結成されたものである。当時その斬捨御免の辛辣な批評が、新人作家連を戦々恐々とさせ、「あの批評作家連に青酸カリを盛って殺してやりたい」といった発言をしたところからそういった名前がついた。（山村正夫談）



◆探偵小説界の騒動◆

【探偵小説最高芸術論】

探偵小説界における本格派と文学派の対立は、こうがさぶろう甲賀三郎が昭和 10 年発刊の雑誌『ぷろふいる』に載せた「探偵小説講和」の中で、「探偵小説非芸術論」を主張したのがきっかけであった。「探偵小説は文学でも芸術でもない。それは娯楽物である。文学とか芸術にしようとする、かえってうまいものがない」というのが甲賀の主張だった。これに対して異を唱えたのが木々高太郎で、翌年従来作品の非芸術性を否定し「探偵小説としての真髄に至れば至るほど、ますます芸術となり、ますます芸術小説となると考える」という立場を固執し、探偵小説最高芸術論にまで発展していった。

【抜打座談会】

『新青年』が企画した「抜打座談会」が昭和 25 年 4 月号同誌に掲載される。これは木々高太郎の新年会に集まったメンバーに抜打で「探偵小説は芸術作品か」というテーマに沿って座談会をしてもらおうという企画であった。参加者は木々高太郎、大坪砂男、ながせさんご みやの永瀬三吾、宮野むらこ ひかわろうほんまたまよ叢子、氷川瓏、本間田麻誉、岡田鯨彦の 7 人。参加者のほとんどは文学派を自任していた。

この後『宝石』昭和 25 年 5 月号に、江戸川乱歩が「抜打座談会を評す」を掲載。この座談会は、もともと「探偵小説最高芸術論」で摩擦の生じていた文学派と本格派の探偵作家の対立の火に油をそそぐ結果となった。それぞれ文学派は木々を筆頭に、本格派は甲賀がいなくなった後は乱歩を筆頭に論争をしていたが、木々と乱歩は不仲というわけではなく、相談の上論争してみようという形であった。しかし、それぞれの下につく若手たちはそうではなく、感情的な論争に発展していった。

きっかけとなった雑誌『新青年』がこの年の 7 月で廃刊となってしまったので、論争が大きく展開されることはなかった。山村正夫は当時のこの事件を「あのころのミステリー界で、これほどの反響を呼んだ大事件はちょっとなかったと言っていい」と振り返っている。

【本格派と文学派】

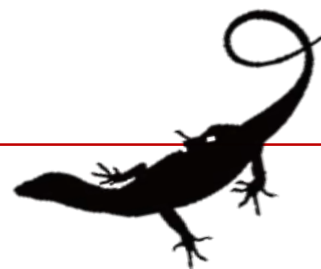
「抜打座談会」の中で、文学派の作家が両派の性格についてこう語っている。文学派とは「探偵小説は探偵小説でよろしいのだ。むしろこれを文学にするような野心は間違いだ。この考えが売れるなら非芸術が売れるということになる。それは大きな間違いです。そう考えるのが文学派」そして「探偵小説は謎解きの面白味、或いは有り得ないような奇術、それが合理的に行われていく、そういう喜び、知的満足を得る喜び、そういうものだけでいい。文学ではない」という主張をするのが本格派だという。

また、「本格派は文学派に対して、トリックとしてここが欠落している。それでは売れないという進言をしてくる」「非常に真剣に文学派を誹謗する人がいる」といった文学派作家の発言からも分かる様に、両派閥の関係は悪かった。

【魔童子論争】

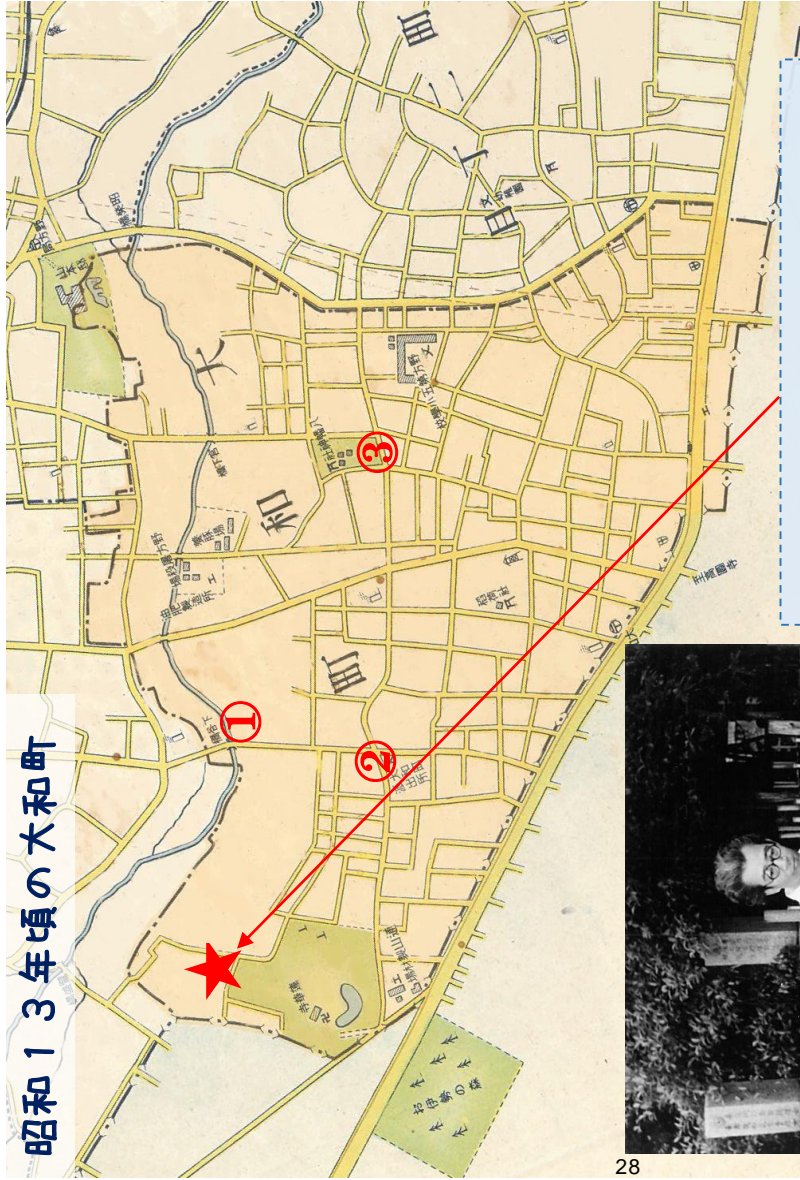
魔童子と名乗る人物が、関西の探偵作家クラブ会報『K T S C』の第49号（昭和27年3月発行）の「暗中鬼話」のなかで、当時の探偵作家クラブ賞を批判して起こった事件。その中にクラブ幹事長大坪砂男を名指しで非難した箇所があった為、大坪が次号に抗議文を寄稿したことで、論戦が展開された。関東と関西の探偵小説界の争いになるかと思われたが、大坪から鞘を収め、双方の悪感情が長く尾を引くことはなく、大坪と関西側はすっかり和解をとげた。

関西側の誰かのように振舞っていたが、実は魔童子の正体は山田風太郎と高木彬光。関西弁に訳したのは香住^{かずみしゅんご}春吾。すべて本格派擁護を掲げた同人雑誌『鬼』のメンバーだった。



昔 今 町 和 大

昭和13年頃の大和町



大和町の町名

中野区に大和町という地名が使われ始めたのは昭和9年5月1日のこと。

それ以前の大和町は、<武蔵国東多摩郡中野郷沼袋村><東京都東多摩郡野方村大字上沼袋><東京都豊玉郡野方村大字上沼袋><東京都中野区沼袋南1丁目・2丁目>といった地名の変遷をたどってきた。

昭和7年東京市編入の際、市が沼袋南1丁目・2丁目と変更したことに、丁目を分けるのは町のコミュニティの分断に値するとして、住民の町名改正運動が起こった。初めは昔からある地名「大場」という名前が候補に挙げられるが、その「大場」にも反対の声。住民で話し合った結果、新しい人も古い人も「大きな和」をもって「町」を作ろうという意味の、「大和町」という町名に決まり、今に至る。

参考文献：『大和町うるわし』大和地域歴史編纂委員会／編

かいまんそう 海鰻荘

香山滋の住まいである通称<海鰻荘>があったのは、大和町蓮華寺の裏。探偵作家仲間のたまり場になっていた。

◀中野区大和町蓮華寺墓地にて

香山の自宅からは蓮華寺を眺めることができた。短歌の題材にもなっていた。

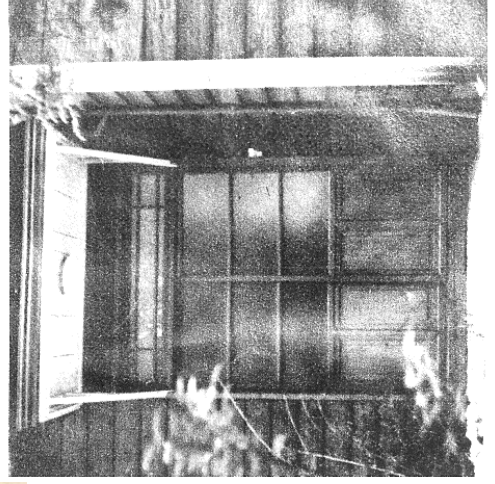
[写真：個人蔵]



◀香山の自宅

かいまんそう
<海鰻荘>の玄関

[写真：個人蔵]



戦前の大和町

農家が多く、田園風景が広がっていた大和町だが、関東大震災以後、都心部から人口の大量流出が起こった為、大和町も人口が増加し始める。震災前の人口は約千人程度だったのが、昭和10年には約1万2千人にまで増加し、その後も増え続けた。主にサラマンや官公史などの中間層が移り住んだ。大蔵省勤めの香山が大和町に越してきたのもちょうどこの時期である。



▲昭和15年5月休閑地開墾 大和町にて [写真：中野区提供]



戦中の大和町

戦中、大和町も空襲を受けた。主に焼夷弾の被害を受けたのは大和町1丁目付近。香山が住む家の付近は火災の難を逃れた。



▲①昭和初期 妙正寺川の清流 (下谷橋附近 現大和町4丁目) [写真：中野区提供]



▲②昭和26年 大和町出張所 [写真：中野区提供]

▶③昭和19年 隣組の銃剣術訓練 大和町で [写真：中野区提供]



香山滋 年譜

年代	年齢	出来事
明治37年 (1904)	0歳	7月1日 旧東京市牛込区通寺町73番地（現在の新宿区神楽坂）に、父豊太郎、母トキの長男として生まれる。
明治44年 (1911)	7歳	4月 津久戸小学校に入学。
大正6年 (1917)	13歳	3月 津久戸小学校卒業。 4月 府立四中（現在の都立戸山高校）に入学。
大正7年 (1918)	14歳	早稲田大学出版部より出版された、理学博士横山又次郎著『前世界史』を四中在学中に図書室で読み、古生物学、地質学に興味を持つようになり、独学で勉強するようになる。また、在学中から短歌に親しむようになる。
大正10年 (1921)	17歳	3月 府立四中を卒業。
大正11年 (1922)	18歳	4月 法政大学予科入学、経済学部に進む。
大正14年 (1925)	21歳	10月 法政大学経済学部中退。 12月 大蔵省に入省。初めは臨時職員だったが、数年後に本採用とされる。
昭和8年 (1933)	29歳	12月13日 伊賀山さだと結婚（父豊太郎の後妻よしの妹）
昭和10年 (1935)	31歳	中野区大和町に居を構える。
昭和12年 (1937)	33歳	大蔵省の機関紙『財政』和歌欄に短歌を投稿。 8月に採用され、以後昭和15年までしばしば短歌、随筆を寄せる。 この年、一時的に神奈川県に移るが、再び中野区大和町に戻る。
昭和13年 (1938)	34歳	4月 短歌同人会「衛」に入会。鈴木北溪に師事する。
昭和14年 (1939)	35歳	3月16日 太田城太郎事務官と共に茨城県に出張 12月 五島茂の主宰する短歌雑誌『立春』に入会。五島茂を始め五島美代子、筏井嘉一に師事する。
昭和15年 (1940)	36歳	11月 筏井嘉一が主宰となって「蒼生短歌会」を創立。 12月25日 『蒼生』創刊号が発刊され、翌年1月から参加。筏井の薫陶を受け、『蒼生』ほぼ全号に短歌を発表する。
昭和16年 (1941)	37歳	2月2日 京橋の八重洲園に於いて『蒼生』創刊祝賀会に参加。 5月18日 上野公園東華亭に於いて蒼生五月歌会に参加。 12月 正式に『蒼生』の同人となる。
昭和17年 (1942)	38歳	1月18日 蔵前一丁目植木屋に於いて開催された蒼生一周年記念歌会に参加。 11月 『蒼生』の「誌上短歌会（第11回）題【魚】」の選者となり、批評文「選後に」を書く。
昭和19年 (1944)	40歳	『蒼生』は時局悪化のため3月号で球刊。 以後、「かがみ会」という会員限定の小さな組織をつくり細々と活動する。
昭和20年 (1945)	41歳	11月18日 かがみ会の歌会が新橋の蔵前工業会館で催され、新雑誌を発刊することに決定。かがみ会 12月2日 は新しい会の成立と共に解消。 12月16日 創刊準備支援会 誌名『定型律』、会名「定型律短歌会」、主催筏井嘉一 定型律短歌会発起人会に参加。
昭和21年 (1946)	42歳	4月 探偵小説雑誌『宝石』が岩谷書店より創刊。 6月 『定型律創刊準備号』発刊。短歌五首を発表。 7月 『定型律創刊号』発刊。短歌五首を発表。 5日 小説の処女作「オラン・ペンテクの復讐」を『宝石』に投稿する。 12月 『宝石』入選。

昭和22年 (1947)	43歳	<p>1月27日 『宝石』の在京入選者の座談会に出席。「海鰻荘奇譚」の原稿を城昌幸に渡す。</p> <p>4月 『宝石』に「オラン・ペンデクの復讐」が掲載され、作家としてデビューする。</p> <p>6月頃 江戸川乱歩会長の「探偵作家クラブ」に入会。</p> <p>21日 毎日ホールにて行われた探偵作家クラブ主宰の物故探偵作家慰霊祭・講演と探偵劇の会に出席。</p> <p>12月20日 京橋相互ビル東洋軒で開催された、第19回土曜会に出席。</p>
昭和23年 (1948)	44歳	<p>1月25日 江戸川乱歩邸での新人探偵作家の集いに参加。</p> <p>28日 「海鰻荘奇譚」が第一回探偵作家クラブ新人賞を受ける。土曜会に於いてクラブ賞贈呈式が行われた。</p> <p>6月 大蔵省銀行局預金部統計係を辞任。専業作家となる。 城昌幸の斡旋で岩谷書店から創刊予定の『冒険』の主幹に就任し、一年半岩谷書店に就社したが『冒険』創刊は立ち消えとなった。</p> <p>7月17日 高木彬光、山田風太郎、岩田蕨、楠田匡介らと探偵小説新人会を結成。 第26回土曜会、銀座クラブにて香山、高木、島田一男の合同出版記念会が行われる。</p> <p>10月 37年6月まで探偵作家クラブ幹事を勤める。</p>
昭和24年 (1949)	45歳	<p>3月 『X』三月臨時増刊号に「探偵小説募集」が発表され、江戸川乱歩、大下宇陀児、角田喜久雄、と共に選者になる。</p> <p>11月6日 浅草花屋敷に於ける半七塚除幕式に出席。</p> <p>12月30日 NHKの横溝正史原作、武田武彦脚色の「びっくり箱殺人事件」に柴田楽亭役で出演。 この年から猫を飼い始める。</p>
昭和25年 (1950)	46歳	<p>7月 『悪魔の星』がラジオ映画会社で映画化予定されるが立ち消えとなる。 この月創刊の探偵小説同人誌『鬼』に参加。</p> <p>9月 書齋を「海鰻荘」と名づける。</p> <p>10月30日 角田喜久雄邸に於て水谷準の追放解除を祝う家庭会に出席。 この年、異母末妹良子を養女にする。(昭和11年生まれた時からの約束)</p>
昭和26年 (1951)	47歳	<p>1月7日 自宅で年始会を行う。探偵作家仲間が集う。</p> <p>10月 探偵小説同人誌『鬼』第五号を全面編集。</p>
昭和27年 (1952)	48歳	<p>3月1日 熱海の大柿舎に探偵作家仲間と旅行。</p> <p>18日 NHK第二放送「新世界設計図」“黄金騒動の巻”第三夜に香山博士として出演。</p> <p>11月28日 読書会館にて探偵作家クラブ五周年記念祭が行われ、懸賞クイズ「この怪人は誰か？」を高木彬光、山田風太郎、大坪沙男、島田一男と共に出演。</p> <p>12月30日 NHKラジオの放送劇「バラ屋敷の秘密」に熱帯魚の研究者として出演。</p>
昭和28年 (1953)	49歳	<p>3月1日 NHK「話の泉」にゲスト出演。</p> <p>7月5日 山田風太郎邸で開かれた「鬼」同人会に出席。</p> <p>23日 NHK「話の泉」にゲスト出演。 中野区大和町より、北多摩郡田無町下宿413に転居。</p>
昭和29年 (1954)	50歳	<p>2月 「少年文学会」幹事、及び同会第1回少年文学賞銓衡委員となる。</p> <p>4月24日 大蔵大臣官邸にて預金部会OB会に出席。</p> <p>5月 東宝のプロデューサー田中友幸、文芸部松下忠が来宅。怪獣映画の原作を委嘱される。</p> <p>6月 「G作品検討用台本」(ゴジラ)を執筆。</p> <p>8月9日 ラジオ東京で香山と原田三夫、江戸川乱歩との座談会を録音。</p> <p>28日 第94回土曜会で「ゴジラについて」を講演。</p> <p>10月25日 東宝撮影所中庭で開催された、ゴジラ祭に出席。</p> <p>28日 東宝本社試写室にて「ゴジラ」の探偵作家クラブ試写会があり、試写後、中華飯店慶楽にて渡辺啓助、城昌幸、高木彬光、香山を囲んで座談会が行われる。</p> <p>30日 東京会館の江戸川乱歩還暦祝賀会に出席。</p> <p>11月3日 東宝映画「ゴジラ」公開。</p> <p>12月下旬 熱海の旅館緑風閣に東宝に9日間ほど缶詰にされ、「ゴジラの逆襲」の原作を執筆。 この年、「S作品検討用台本」(獣人雪男)を執筆。</p>

昭和30年 (1955)	51歳	<p>2月13日 上野竹町菓子会館にて40年ぶりの小学校同窓会に出席。</p> <p>4月23日 日比谷公園でゴジラ祭が催され、東宝本社での「ゴジラの逆襲」試写会で作品の説明をする。</p> <p>24日 東宝映画「ゴジラの逆襲」公開。</p> <p>29日 熱海の緑風閣にゴジラ映画スタッフ、小田基義、田中友幸、日高繁明、村田武雄、円谷英治、松下忠を招き一泊二日の慰労会を行う。</p> <p>6月29日 角田喜久雄の家へ自作の「キキモラ」(NHK)を見に行く。</p> <p>8月1日 東宝映画「獣人雪男」公開。</p> <p>30日 東宝砧撮影所で渡辺啓助原作、日高繁明監督の映画「姿なき目撃者」撮影を見学。写真撮影会も催され、『読売グラフ』9月20日に掲載される。</p> <p>29日 虎ノ門晩翠軒で開かれた土曜会に参加。佐藤みどり『情事の部屋』出版記念会で、祝辞を述べる。</p> <p>この年の秋、肝臓を悪くし二ヶ月ほど入院、全快する。</p>
昭和31年 (1956)	52歳	<p>4月21日 日活国際会館で行われた大下宇陀児の『虚像』出版記念会に出席。</p> <p>8月1日 胃潰瘍のため入院。</p> <p>10月2日 退院。</p> <p>退院後10ヶ月ほど静養し全快。</p>
昭和32年 (1957)	53歳	<p>2月 渋谷の菊亭にて木村武、田中友幸、本多猪四郎、松下忠、円谷英二らと「地球防衛軍」のストーリーを検討。</p> <p>7月8日 東宝ミュージカル、江戸川乱歩原作、菊田一夫演出の「パノラマ島奇譚」観劇会に探偵作家クラブの有志と共に参加。</p> <p>12月8日 日活会館にて木々高太郎還暦祝賀会に出席。</p> <p>26日 「地球防衛軍」の試写会。</p> <p>28日 東宝映画「地球防衛軍」公開。</p>
昭和33年 (1958)	54歳	<p>1月7日 木々高太郎亭の新人激励新年会に参加。</p> <p>21日 楠田匡介『いつ殺される』出版記念会に参加。</p> <p>2月1～4日 第一生命ホールでテアトル・エコーのクルト・ゲッツ作「婦人科医プレトリウス博士」にソーンダイク博士役で出演</p> <p>3月 香港発行の旬刊雑誌『藍皮書』3月1日に「妖蝶記」が東方儀の訳で掲載される。</p> <p>4日 探偵作家仲間と修善寺温泉に旅行。</p> <p>4月26日 土曜会で夜の上野動物園を見学。</p>
昭和34年 (1959)	55歳	<p>2月28日～ 第一生命ホールにて公演のテアトル・エコーの「スパイの技術」に出演。</p> <p>3月1日 (キノトール作、山村正夫演出)</p> <p>6月13日 日活国際会館にて開かれた『ヒッチコック・マガジン』創刊記念パーティーに出席。</p> <p>11月16日 日活国際会館で催された第5回江戸川乱歩賞授賞式に出席。</p>
昭和35年 (1960)	56歳	<p>1月23日 府中市中河原の料亭大國にて古沢仁の医学博士号授与を祝う会に出席。</p> <p>4月30日 虎ノ門晩翠軒にて樫八郎の還暦祝賀会が行われ、祝辞を述べる。</p>
昭和36年 (1961)	57歳	<p>7月1日 日活国際会館で行われた江戸川乱歩の『探偵小説四十年』出版記念会に出席。</p>
昭和37年 (1962)	58歳	<p>6月2日 ホテルオークラにて、横溝正史、渡辺啓助、黒沼健、永瀬三吾四氏の還暦祝いに出席。</p> <p>11月6日 銀座葉山ホールで催された第1回虫プロ映画の会を見る。上映作品は「鉄腕アトム」「おす」「ある街角の物語」</p> <p>早大生物学教室の高島春雄教授の世話で新しく発足した、「爬虫類談話会」(後に日本爬虫類学会→日本爬虫類両棲学会に発展)に入会。青山学院大学生物学教室で聴講を重ねる。</p>
昭和38年 (1963)	59歳	<p>3月27日 娘、良子が結婚。</p> <p>6月 42年5月まで日本推理作家協会理事を務める。</p> <p>夏から秋にかけて、雑菌性腸炎になるが全快。</p>
昭和39年 (1964)	60歳	<p>1月25日 日活ホテルにて、城昌幸の『みすてりい』出版記念会の発起人として参加。</p> <p>3月31日 日活ホテルにて、河野典生、結城昌治受賞の日本推理作家協会賞受賞式パーティーに出席。</p> <p>4月15日 娘良子に長男誕生。</p> <p>8月27日～ 東海道新幹線に試乗。</p> <p>28日</p> <p>雑誌『宝石』が廃刊。</p> <p>この年の夏より雑誌や新聞に発表した自作の膨大な切り抜きを、特注スクラップブックにスクラップする作業を開始。夏期のみ作業で5年かかり、43年に完成した。</p>

昭和40年 (1965)	61歳	4月17日 大蔵省OBとして大蔵大臣官邸に招かれる。
昭和41年 (1966)	62歳	8月27日 日活国際会館シルバールームにて江戸川乱歩を偲ぶ会が催され、発起人として出席。 この年、戦前の『財政』『蒼生』、戦後の『定型律』に発表した短歌や未発表の短歌を自筆原稿として一冊のノートに「歌集十年」としてまとめる。
昭和42年 (1967)	63歳	6月 48年5月まで日本推理作家協会幹事を務める。
昭和46年 (1971)	67歳	自作の作品目録、著書目録等のリストを一冊のノートにまとめる。
昭和49年 (1974)	70歳	11月 体調が優れず、近所のかかりつけ医に通院を始める。 12月 虚血性心不全と診断される。
昭和50年 (1975)		2月7日 心不全により、香山滋没。 9日 田無の自宅で告別式が開かれる。

参考文献：『香山滋全集 別巻』 「年譜」

香山滋作品 年表

昭和12年 (1937)	33歳	大蔵省の機関紙『財政』和歌欄に短歌を投稿。
昭和15年 (1940)	36歳	12月25日 『蒼生』創刊号が発刊され、翌年1月から参加。 筏井の薫陶を受け、『蒼生』ほぼ全号に短歌を発表する。
昭和16年 (1941)	37歳	12月 正式に『蒼生』の同人となる。
昭和21年 (1946)	42歳	6月 『定型律創刊準備号』発刊。短歌五首を発表。 7月 『定型律創刊号』発刊。短歌五首を発表。 5日 小説の処女作「オラン・ペンデクの復讐」を書き上げ、『宝石』に投稿す 12月 『宝石』入選。

	単行本			雑誌掲載					
	出版日	書名	出版社	月	雑誌名	作品			
昭和22年 (1947)				4月	『宝石』	「オラン・ペンデクの復讐」			
				5月～ 7月	『宝石』	「海鰻狂奇譚」			
				1月	『宝石』 『宝石・捕物と新作長編』	「蜥蜴の島」 「オラン・ペンデク後日譚」			
				2月	『ホープ』 『ダイヤ』	「木乃伊の恋」 「エル・ドラドオ」			
				3月	『真珠』 『新読物』	「処女水」 「愛欲の黄薔薇」			
				4月	『大都会』 『ロック』 『旅と読物』	「腕」 「女賊と少年」 「殺意」			
				5月	『別冊旬刊ニュース』 『黒猫』 『人情』	「緑色人間」 「天牛」 「不貞」			
				6月	『新探偵小説』 『サロン』 『探偵少年』（連載）	「金鶏」 「獣よりも惨めに」 「怪龍島」（初の少年もの）			
				3月15日	『剥製師Mの秘密』	江戸書院	7月	『コメット』	「妖夢」
				4月20日	『怪異馬霊教』	岩谷書店		『平凡』	「宝石婦人」
				5月20日	『オラン・ペンデク奇譚』	岩谷書店		『別冊宝石』	「ベトルーシュカ」
				12月8日	『木乃伊の恋』	岩谷書店		8月	『じーぶ』
12月10日	『蜥蜴夫人』	扶桑書房	『ユーモア』	「風の裏街」					
			『東京』	「双炎」					
昭和23年 (1948)					『真珠』	「妖虫記」			
					『サンデー毎日』（連載）	「蜥蜴夫人」			
				9月	『ホープ』 『宝石』 (24年5月まで連載)	「美しき獣」 「ソロモンの桃」（初の長編）			
				10月	『新風』 『富士』（12月まで連載）	「薔薇乳房」 「恐怖の仮面」			
				11月	『新文庫』 『Gメン』（24年11月12月合 併号まで連載）	「死の接吻」 「恐怖島」			
				12月	『ホープ』 『ロマン春秋』	「海蛇の島」 「獣人ゴースト」			
				1月	『別冊宝石』 『小説文庫』	「月ぞ悪魔」 「氷島の魔女」			
				2月	『読物と講談』 『ユーモア』 『新風』	「女賊ロサ」 「死恋」 「情魂」			
				3月	『面白倶楽部』	「深海魚」			
					『定型律』	「水族」（短歌十六首）（山田 鉦治として短歌を発表するのは これが最後。）			
	『講談倶楽部』	「沈黙の復讐」							

昭和24年 (1949)	45歳			4月	『婦人画報』 (9月まで連載)	「美しき山猫」	
		3月10日	『海底牢獄』	偕成社	5月	『富士』 『新文庫』	「夜の宿」 「椿と乳房」
		11月10日	『ソロモンの桃』	岩谷書店	6月	『講談倶楽部』 『宝石』	「人魚」 「白昼夢」
					7月	『クラブ』 『宝石』 『週刊朝日増刊』	「殺人招待状」 「水族館の殺人」 「緑の蜘蛛」
					8月	『読切読物』 『実話講談の泉』	「トカゲ乳房」 「恐怖のトランク」
					9月	『実話講談の泉』	「怪盗紅蝙蝠団」
					10月	『新文庫』 (25年2月まで連載)	「美しき魔女」
					11月	『小説の泉』 『モダン日本』	「爬虫邸奇譚」 「喪服夫人」
					12月	『宝石』	「クリスマス島奇談」
昭和25年 (1950)	46歳				1月	『宝石』 『新青年』 『少年世界』 (7月まで連載。廃刊のため後半 を書き下ろして光文社より刊 行。)	「孤独の断崖」 「タヒチの情火」 「Z・9」
					2月	『花馬車』	「紅の乳首」
					3月	『小説世界』	「悲しき証明」
					4月	『宝石』 『財政』	「心臓花」 「妖術師」
		1月15日	『恐怖の不時着』	新浪漫社 浅田書店	5月	『実話講談の泉別冊探偵実話』 『怪奇探偵クラブ』	「恋の脱獄囚」 「十字架おむら」
		5月5日	『悪魔の星』	ポプラ社	6月	『デカメロン』 『宝石』 (10月まで連載)	「女体晴雨」 「火星への道(前編)」
		12月25日	『Z・9』	光文社			
昭和26年 (1951)	47歳				7月	『富士』 『夕刊北海道新聞』(7月30日か ら9月1日まで)	「魔林の魔女」 「半爬虫人」(初の新聞連載)
					8月	『富士別冊』 『実話講談の泉別冊探偵実話』	「不死の女王」 「蛇姫殺人事件」
					9月	『怪奇探偵クラブ』	「水棲人」
					10月	『少年少女譚海』 (26年8月まで連載)	「タンガニーカの砦」
					11月	『奇譚探偵クラブ』	「呪いの指輪」
					12月	『実話と読物』	「魔海の使者」
昭和27年 (1952)	48歳				1月	『探偵クラブ』	「炎の島」
					4月	『宝石』(10月まで連載)	「火星への道」(後編)
					8月	『探偵実話』 (27年4月まで連載)	「悪霊島」
					9月	「死の密会」	『モダン生活』
					10月	『富士』	「海底降下三千呎」
					1月	『宝石』	「砂丘の家」
			4月	『宝石』	「北京原人」		
			6月	『宝石』 『探偵実話』	「花妖」 「女食人族」		
			7月	『宝石』	「蠟燭売り」		
			8月	『宝石』	「シャト・エル・アラブ」		
			9月	『宝石』 (28年8月まで連載) 『少年少女おもしろブック』 (連載)	「手錠と女」 「海賊海岸」		
			11月	『宝石』 『娯楽倶楽部』	「キキモラ-してやられた妖精-」 「妖夢の宿」		
			12月	『宝石』 『探偵倶楽部』	「女と猫」 「ティエラ・エル・ブランカ」		

昭和28年 (1953)	49歳	8月5日	『怪龍島』	愛文社	1月	『宝石』 『面白倶楽部新春特別号』	「悪の相」 「艶獣」			
					2月	『宝石』	「ハゲタカ」			
					4月	『宝石』 『読物』	「烤鴨子」 「アルタバン島の審判」			
					5月	『宝石』 『探偵倶楽部』	「脱獄者」 「怪魚シーラカンス」			
					6月	『宝石』 『太陽少年』 (29年5月まで連載)	「ウェスタ・グランデ」 「怪人赤い蜘蛛」			
					7月	『宝石』	「死と少女」			
					8月	『宝石』 『探偵実話』 『面白倶楽部増刊』	「熱風」 「アナク・クラカトア」 「海から来た妖精」			
					9月	『宝石』	「老踏切番」			
					10月	『宝石』	「東崎氏の冒険」			
					11月	『宝石』	「ネンゴ・ネンゴ」			
					12月	『宝石』	「田螺骨董店」			
					昭和29年 (1954)	50歳	9月	『魔女の森』(翻訳)	偕成社	1月
2月	『小説倶楽部』	「被虐の果てに」								
3月	『宝石増刊』	「恋の蜘蛛形師」								
4月	『宝石』	「月に戯れるな」								
6月	『宝石』	「狂った人々」								
7月	『探偵倶楽部』	「小妖女」								
8月	『宝石』 『宝石増刊』 『読切小説集』	「崖下の小屋」 「美女と赤蟻」 「熱沙の涯」								
11月	『探偵実話』 『別冊宝石』	「通り魔」 「海鰻狂後日譚」								
1月	『夫婦生活』 (6月まで連載)	「無償娼婦」								
3月	『恐怖島』	東方社	2月	『面白倶楽部』						「女怪の島」
5月	『ジャングルと砂漠』 『科学と冒険』 『剥製人間』	大蔵出版 大蔵出版 東方社	3月	『面白倶楽部』						「怪物見世物師」
7月	『ゴジラ』 (東京大坂編)	島村出版	8月	『宝石』 『小説サロン』 (10月まで連載)						「風船売り」 「獣人雪男」
9月	『獣人雪男』	東方社	9月	『探偵倶楽部増刊』 『傑作倶楽部』 (31年2月まで連載)	「妖鳥記」 「遊星人M」					
10月	『悪霊島』 『魔婦の足跡』	春陽堂書店 大日本雄弁会 講談社	10月	『読切小説集』	「ソロモンの秘宝」					
昭和31年 (1956)	52歳	7月	『魔法医師ニコラ』(翻訳)	偕成社	1月	『宝石』(12月まで連載) 『小説と読物』 (5月まで連載)	「地球喪失」 「悲恋の魔術師」			
					3月	『東京新聞』(23日から11月9日 日まで連載)	「鳥人バット」			
					4月	『小説倶楽部』	「閉ざされた窓」			
					2月	『小説倶楽部』	「炎となる慕情」			
昭和32年 (1957)	53歳				3月	『読切小説』 『講談倶楽部』	「コモンゴ」 「誰が、わたしを？」			
					6月	『講談倶楽部増刊』 『別冊週刊サンケイ』	「明日の悪夢」 「霧悪魔」			
					8月	『面白倶楽部増刊』	「牝鴨」			
					10月	『よみうり少年少女新聞』(22日 より33年4月2日まで連載)	「怪物ジオーラ」			
					12月	『面白倶楽部』	「魔女の乳房」			

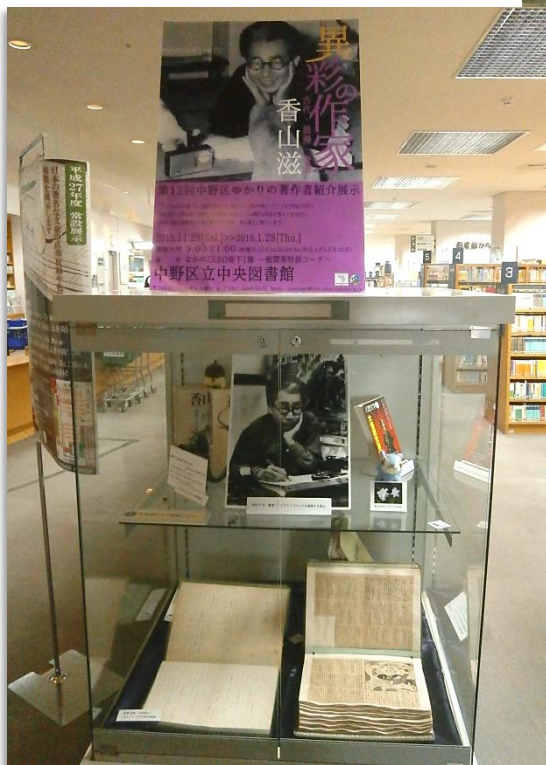
昭和33年 (1958)	54歳			3月	『面白倶楽部』	「何処かで見た女」	
		1月	『ソロモンの宝窟』 (翻訳)	偕成社	4月	『読切特撰集』	「人間ライカ」
		7月	『秘島X13号』	東光出版社		『中学時代二年生』 (34年3月まで連載)	「緑色人間の秘密」
		10月	『悪魔の教科書』	文芸評論新社	5月	『読切小説集』	「遊星人アヌラ」
		11月	『秘境の女』 『有翼人』	天壺天書房 和同出版社	6月	『面白倶楽部増刊』	「美しき女奴隷」
					7月	『中学一年コース』 (34年3月まで連載)	「恐怖谷のなぞ」
昭和34年 (1959)	55歳			9月	『宝石』	「犬と剃刀」	
		2月	『魔境原人』	同光出版	11月	『傑作倶楽部増刊』	「狂った乳房」
		3月	『妖蝶記』	講談社	1月	『宝石』	「オラン・ペンデク射殺事件」
					4月	『小説の泉』	「怪人ゴーラ」
昭和35年 (1960)	56歳			5月	『宝石』	「無駄な殺人」	
					8月	『講談倶楽部』	「蛾はどこにでもいる」
		3月	『靈魂は訴える』	桃源社	10月	『宝石』	「マンドラカーリカ」
		4月	『臨海亭奇譚』	講談社	1月	『講談倶楽部』	「魔女よりも美しく」
昭和36年 (1961)	57歳			3月	『宝石』	「みのむし」	
		11月	『魔女のいる街』	東都書房	8月	『時の窓』 (36年7月まで連載)	「魔女のいる街」
					10月	『宝石』	「ひとりすもう」
昭和37年 (1962)	58歳			3月	『宝石』	「十万弗の魚料理」	
					8月	『宝石』	「貝は黙っていた」
					12月	『宝石』	「人間昆虫」
					1月	『エロティック・ミステリー』 (12月まで連載。6月より『旅と 推理小説』に誌名改題)	「ベット・ショップ・R」
					2月	『みわく』	「わたしは美しい」
昭和38年 (1963)	59歳			7月	『宝石』 『漫画ストーリー』	「疑り性」 「禁じられた肌」	
					9月	『週刊大衆』	「貝は知らない」
					2月	『漫画ストーリー』	「泥まみれ」
昭和39年 (1964)	60歳			5月	『宝石』	「すっぽん」	
昭和42年 (1967)	63歳			12月	『宝石』	「アリクイ」	
昭和43年 (1968)	64歳			2月	『別冊ニュース特報』(読切連作 を7月まで連載)	「狂夢の記録」	
昭和44年 (1969)	65歳	2月	『怪物ジオラ』(改訂版)	毎日新聞社	12月	『ニュース特報』	「女人抱卵」
		12月	『海鰻狂奇譚』 (1940年代自選作品集)	桃源社	4月	『推理界』	「マグノリア」
昭和46年 (1971)	67歳				9月	『別冊小説宝石』	「ガブラ-海は狂っている-」
昭和50年 (1975)	没						

参考文献：『香山滋全集 別巻』「年譜」

展示風景



◀展示スペース



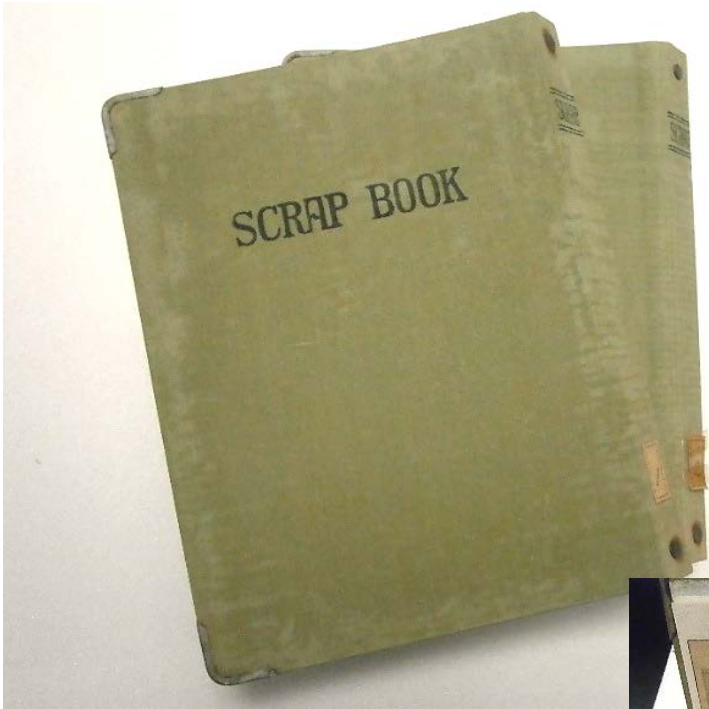
◀正面入口ガラスケース



▲展示スペース 平置きガラスケース



ガラスケース内展示資料



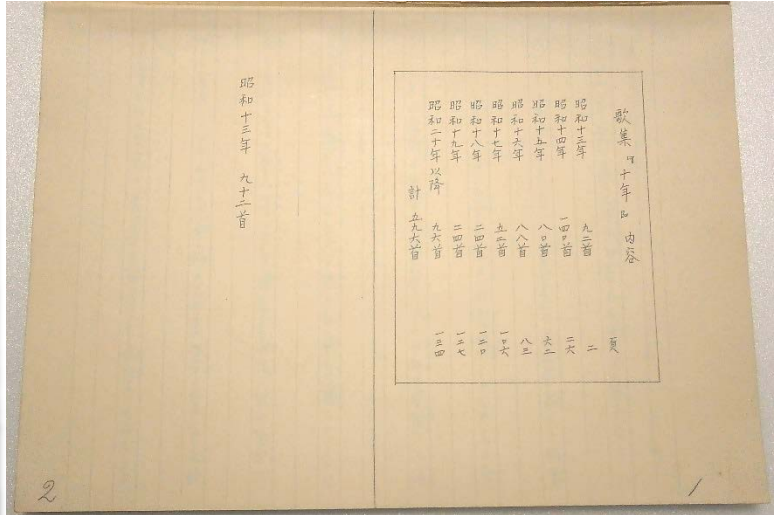
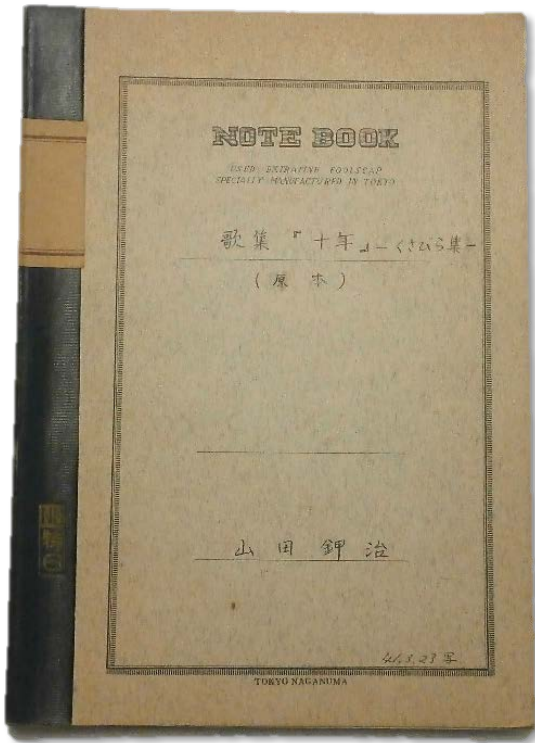
香山特注のスクラップブック。100冊以上作成していた。
【個人蔵】



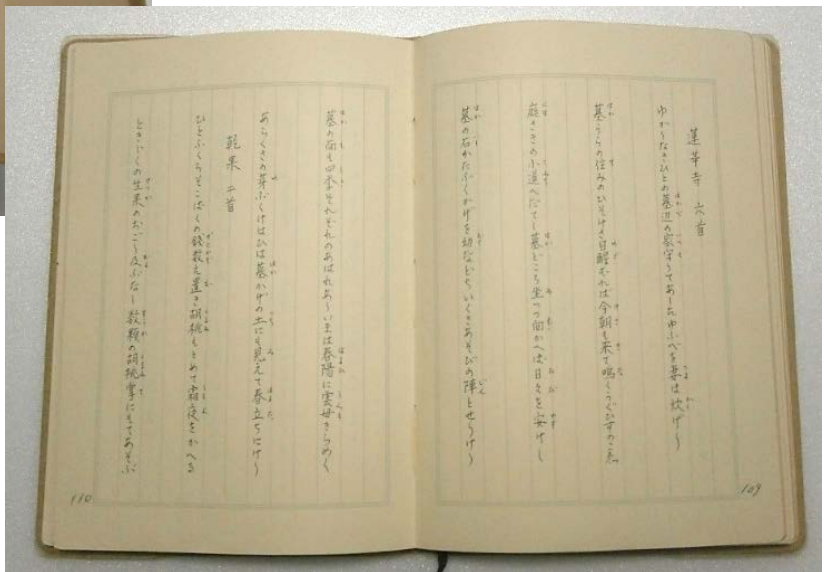
①

INDEX

1	オレン・ペンデルの復讐	寶石	23.4
18	オレン・ペンデル後日譚	3	23.1
257	オレン・ペンデル射殺事件	3	30.1
2	海鱈荘奇談	3	22.5~7
214	海鱈荘後日譚	3	29.11
56	ソロモンの桃 (附: 漢文)	3	23.1 ~ 24.5
14	蜘蛛の島	3	25.4
115	女検事自伝	財政	23.7
45	バトル・エカ	寶石	24.1
68	月夜悪魔	3	24.7
95	水族館の殺人	3	23.1
6	狐舌館 スワインズ	ロッキ	22.10



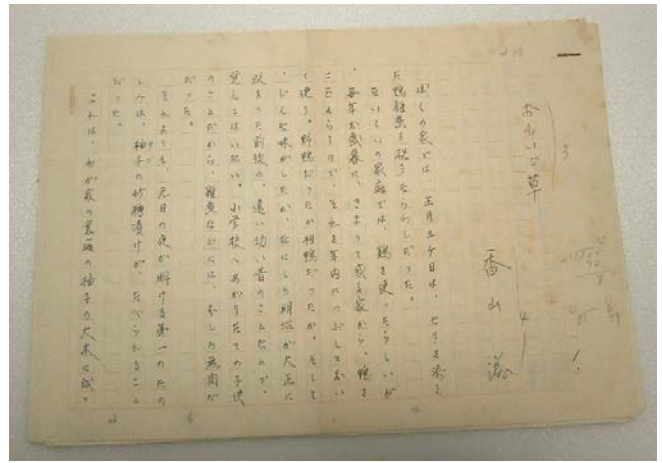
香山直筆歌集（上）とその直筆複本（下） [個人蔵]





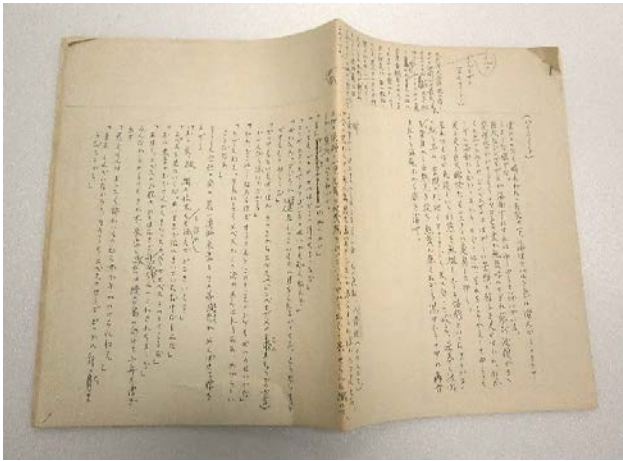
▲「先生、ありがとう」直筆原稿

[ミステリー文学資料館蔵]



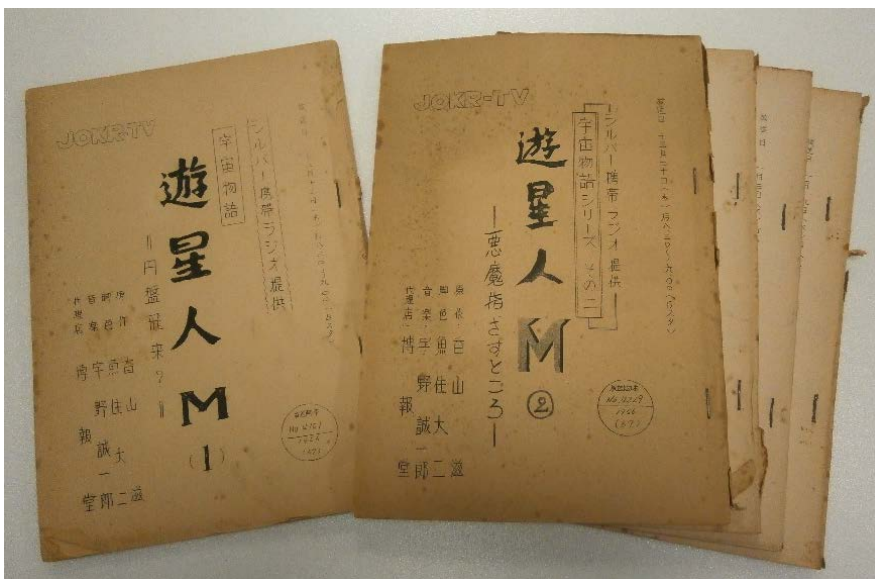
▲「おもいで草」直筆原稿

[ミステリー文学資料館蔵]



▲遺作「ガブラ〜海は狂っている〜」直筆原稿

[ミステリー文学資料館蔵]



◀『遊星人M』シナリオ

[ミステリー文学資料館蔵]



◀ 『オラン・ペンデク奇譚』

[ミステリー文学資料館蔵]



▶ 『蛇蝎夫人』

[ミステリー文学資料館蔵]

▼ 『獣人雪男』

[ミステリー文学資料館蔵]



◀ 『剝製師 M の秘密』

[ミステリー文学資料館蔵]

▶ 『怪異馬霊教』

[ミステリー文学資料館蔵]



◀ 『靈魂は訴える』

[ミステリー文学資料館蔵]

『異彩の作家香山滋～古代・浪漫・奇譚～』関係資料リスト（区内図書館所蔵資料）

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	禁帯
----	-----	-----	-----	------	----

◆香山滋

香山滋全集 第1巻	香山滋/著	三一書房	1993	918.68/カヤ/1	
香山滋全集 第2巻	香山滋/著	三一書房	1994	918.68/カヤ/2	
香山滋全集 第3巻	香山滋/著	三一書房	1994	918.68/カヤ/3	
香山滋全集 第4巻	香山滋/著	三一書房	1995	918.68/カヤ/4	
香山滋全集 第5巻	香山滋/著	三一書房	1996	918.68/カヤ/5	
香山滋全集 第6巻	香山滋/著	三一書房	1995	918.68/カヤ/6	
香山滋全集 第7巻	香山滋/著	三一書房	1994	918.68/カヤ/7	
香山滋全集 第8巻	香山滋/著	三一書房	1996	918.68/カヤ/8	
香山滋全集 第9巻	香山滋/著	三一書房	1997	918.68/カヤ/9	
香山滋全集 第10巻	香山滋/著	三一書房	1995	918.68/カヤ/10	
香山滋全集 第11巻	香山滋/著	三一書房	1997	918.68/カヤ/11	
香山滋全集 第12巻	香山滋/著	三一書房	1994	918.68/カヤ/12	
香山滋全集 第13巻	香山滋/著	三一書房	1995	918.68/カヤ/13	
香山滋全集 第13巻	香山滋/著	三一書房	1995	918.68/カヤ/14	
香山滋全集 第14巻	香山滋/著	三一書房	1996	918.68/カヤ/15	
香山滋全集 別巻	香山滋/著	三一書房	1997	918.68/カヤ/B	禁
蜥蜴(とかげ)夫人	香山滋/著	国書刊行会	1985	913.6/カヤ	
ゴジラ	香山滋/著	筑摩書房	2004	913.6/カヤ	
オラン・ペンデクの復讐	香山滋/著	社会思想社	1977	913.6/カヤ	
ソロモンの桃	香山滋/著	社会思想社	1977	913.6/カヤ	
怪獣小説全集 1 怪獣総進撃	香山滋/ほか著	出版芸術社	1993	913.68/カ	
もだんミステリーワールド6 香山滋集	中島河太郎/編	リブリオ出版	1998	913.68/モ/6	

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	禁帯
日本ミステリーの一世紀【上】	長谷川史親/編	広済堂出版	1995	913.68/ニ/1	
香山滋 名作選 総解説・書誌	竹内博/編	国書刊行会	1985	910.26/カ	禁

◆江戸川乱歩

江戸川乱歩全集 第1巻	江戸川乱歩/著	光文社	2004	918.68/エド/1	
江戸川乱歩全集 第2巻	江戸川乱歩/著	光文社	2004	918.68/エド/2	
江戸川乱歩全集 第4巻	江戸川乱歩/著	光文社	2003	918.68/エド/4	
江戸川乱歩全集 第5巻	江戸川乱歩/著	光文社	2005	918.68/エド/5	
江戸川乱歩全集 第6巻	江戸川乱歩/著	光文社	2004	918.68/エド/6	
江戸川乱歩全集 第8巻	江戸川乱歩/著	光文社	2004	918.68/エド/8	
江戸川乱歩全集 第9巻	江戸川乱歩/著	光文社	2003	918.68/エド/9	
江戸川乱歩全集 第10巻	江戸川乱歩/著	光文社	2003	918.68/エド/10	
江戸川乱歩全集 第11巻	江戸川乱歩/著	光文社	2004	918.68/エド/11	
江戸川乱歩全集 第12巻	江戸川乱歩/著	光文社	2003	918.68/エド/12	
江戸川乱歩全集 第26巻	江戸川乱歩/著	光文社	2003	918.68/エド/26	
江戸川乱歩全集 第27巻	江戸川乱歩/著	光文社	2004	918.68/エド/27	
江戸川乱歩全集 第28巻	江戸川乱歩/著	光文社	2006	918.68/エド/28	
江戸川乱歩全集 第29巻	江戸川乱歩/著	光文社	2006	918.68/エド/29	
江戸川乱歩全集 第30巻	江戸川乱歩/著	光文社	2005	918.68/エド/30	
新文芸読本 江戸川乱歩	—	河出書房新社	1992	910.268/エド	
探偵くらぶ【上】 奇想編	日本推理作家協会/編	光文社	1997	913.68/タ	
乱歩の軌跡 父の貼雑帖から	平井隆太郎/著	東京創元社	2008	910.268/エド	
少年小説大系 第7巻 少年探偵小説集	尾崎秀樹/ほか監修	三一書房	1986	913.68/シ/7	
乱歩彷徨	紀田順一郎/編	春風社	2011	910.268/エド	

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	禁帯
日本探偵小説全集2 江戸川乱歩集	江戸川乱歩/著	東京創元社	1984	913.68/ニ	
貼雑年譜	江戸川乱歩/著	講談社	1989	910.268/エド	

◆城昌幸

「探偵クラブ」傑作選	ミステリー文学資料館/編	光文社	2001	913.68/タ	
「探偵文藝」傑作選	ミステリー文学資料館/編	光文社	2001	913.68/タ	
「探偵」傑作選	ミステリー文学資料館/編	光文社	2002	913.68/タ	
探偵小説の風景【下】	ミステリー文学資料館/編	光文社	2009	913.68/タ	
日本探偵小説全集11 名作集1	海野十三/ほか著	東京創元社	1996	913.68/ニ/11	
のすたるじあ	城昌幸/著	牧神社	1976	913.6/ジヨ	
怪奇の創造	城昌幸/著	有楽出版社	1982	913.6/ジヨ	
新青年傑作選 第2巻	城昌幸/ほか著	立風書房	1991	908.3/シ/2	
新青年傑作選 第3巻	城昌幸/ほか著	立風書房	1991	908.3/シ/3	
日本のSSF(短篇集)古典篇	石川喬司/編	早川書房	1976	908.3/セ/34	
「探偵趣味」傑作選	ミステリー文学資料館/編	光文社	2000	913.68/タ	
「探偵文藝」傑作選	ミステリー文学資料館/編	光文社	2001	913.68/タ	
「X傑作選」傑作選	ミステリー文学資料館/編	光文社	2002	913.68/エ	
別れのとき	文藝春秋/著	文藝春秋	1993	908.3/ワ	
謎のギャラリー 最後の部屋	北村薫/編	マガジンハウス	1999	908.3/ナ	
現代ホラー傑作選 第7集 愛の怪談	高橋克彦/編	角川書店	1999	913.68/ゲ	
怪奇製造人	城昌幸/著	国書刊行会	1993	913.6/ジヨ	

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	禁帯
----	-----	-----	-----	------	----

◆山村正夫

紫陽花の殺意	日本推理作家協会/編	光文社	1989	913.68/ア	
ミステリー傑作集 8 殺しの一品料理	日本推理作家協会/編	講談社	1978	913.68/コ	
ミステリー傑作集 10 闇の中のあなた	日本推理作家協会/編	講談社	1982	913.68/ヤ	
ミステリー傑作集 12 にぎやかな殺意	日本推理作家協会/編	講談社	1982	913.68/ニ	
日本推理作家協会賞全集 32 わが懐旧的探偵作家論	山村正夫/著	双葉社	1996	913.6/ニ	
赤ん坊になった死体	山村正夫/著	光文社	1992	913.6/ヤマ	
魔性の猫	山村正夫/著	郡雄社出版	1983	913.6/ヤマ	
恐怖のアルバム	山村正夫/著	出版芸術社	1994	913.6/ヤマ	
異端の神話	山村正夫/著	新芸術社	1989	913.6/ヤマ	
幻夢展示館	山村正夫/著	新芸術社	1989	913.6/ヤマ	
平家谷殺人行	山村正夫/著	実業之日本社	1988	913.6/ヤマ	
わが懐旧のイタ・セクスアリス	山村正夫/著	KSS出版	1998	913.268/ヤマ	
日本ベストミステリー珠玉集【下】	日本推理作家協会/編	光文社	1992	913.68/ニ/3	
57人の見知らぬ乗客	日本推理作家協会/編	講談社	1992	913.68/ゴ	
名探偵より愛をこめて	関口苑・香山二三四郎/編	講談社	1991	913.68/メ	
推理小説代表作選集 1985	日本推理作家協会/編	講談社	1985	913.68/ス/85	

◆高木彬光

破壊裁判	高木彬光/著	角川書店	1979	913.6/タカ	
新青年傑作集 1 推理小説編	中島河太郎/編	立風書房	1991	908.3/シ/1	
日本推理小説大系 8 島田一男・高木彬光集	高木彬光/ほか著	東都書房	1960	913.68/ニ/8	
神津恭介の復活	高木彬光/著	出版芸術社	1993	913.6/タカ	
神津恭介の回想	高木彬光/著	出版芸術社	1996	913.6/タカ	

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	禁帯
鎖の環	高木彬光/著	双葉社	1997	913.6/タカ	
ポピュラーミステリーワールド 3 高木彬光集	中島河太郎/監修	リブリオ出版	1997	913.68/ポ/3	
ミステリーの魔術師	有村智賀志/著	北の街社	1990	910.268/タカ	
都会の狼	高木彬光/著	光文社	1991	913.6/タカ	
炎の女	高木彬光/著	光文社	1991	913.6/タカ	
五人の探偵たち	高木彬光/著	光文社	1991	913.6/タカ	
わがー高時代の犯罪	高木彬光/著	光文社	1996	913.6/タカ	
誘拐	高木彬光/著	光文社	1994	913.6/タカ	
黒白の囃	高木彬光/著	角川書店	1979	913.6/タカ	
悪魔の火祭り	高木彬光/著	角川書店	1979	913.6/タカ	
白妖鬼	高木彬光/著	角川書店	1989	913.6/タカ	
朱の奇跡	高木彬光/著	出版芸術社	1991	913.6/タカ	
影なき女	高木彬光/著	光風社出版	1983	913.6/タカ	
塔の物語	井上雅彦/編	角川書店	2000	908.3/ト	
出獄	高木彬光/著	光風社出版	1983	913.6/タカ	
日本推理作家協会受賞作全集 4 能面殺人事件	高木彬光/著	双葉社	1995	913.68/ニ/4	
悪魔の嘲笑	高木彬光/著	光風社出版	1983	913.7/タカ	

◆島田一男

新・科学捜査官	島田一男/著	光文社	1992	913.6/シマ	
死体鑑識捜査官	島田一男/著	光文社	1995	913.6/シマ	
屍蠟の市場	島田一男/著	光文社	1989	913.6/シマ	
冥土の顔役	島田一男/著	光文社	1988	913.6/シマ	
現場捜査官	島田一男/著	光文社	1986	913.6/シマ	

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	禁帯
流しびな殺人事件	島田一男/著	光文社	1985	913.6/シマ	
犯罪列島	島田一男/著	徳間書店	1981	913.6/シマ	
最終都内版	島田一男/著	徳間書店	1985	913.6/シマ	
古墳殺人事件	島田一男/著	扶桑社	2002	913.6/シマ	
ポピュラーミステリーワールド 4 島田一男集	中島河太郎/監修	リブリオ出版	1997	913.68/ポ/4	
恋文泥棒 島田一男	島田一男/著	徳間書店	1987	913.6/シマ	
環状特急「死神号」	島田一男/著	徳間書店	1983	913.6/シマ	
熱海走り湯殺人事件	島田一男/著	徳間書店	1994	913.6/シマ	
炎の地図	島田一男/著	徳間書店	1991	913.6/シマ	
海拔455	島田一男/著	徳間書店	1984	913.6/シマ	
湯煙に消ゆ	島田一男/著	広済堂出版	1992	913.6/シマ	
殺意の絆	島田一男/著	光文社	1990	913.6/シマ	
熱海逢初橋殺人事件	島田一男/著	徳間書店	1995	913.6/シマ	
東京殺人地図	島田一男/著	徳間書店	1992	913.6/シマ	
特報社会部記者	島田一男/著	青樹社	1997	913.6/シマ	

◆山田風太郎

青春探偵団	山田風太郎/著	広済堂出版	1997	913.6/ヤマ	
誰にでもできる殺人	山田風太郎/著	広済堂出版	1996	913.6/ヤマ	
十三角関係	山田風太郎/著	大和書房	1983	913.6/ヤマ	
十三の階段	山田風太郎/ほか著	出版芸術社	2003	913.6/ヤマ/3	
戦後変格派・山田風太郎	谷口基/著	青弓社	2013	910.268/ヤマ	
わが推理小説零年	山田風太郎/著	筑摩書房	2007	914.6/ヤマ	
戦中派焼け跡日記	山田風太郎/著	小学館	2002	915.6/ヤマ	

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	禁帯
戦中派闇市日記	山田風太郎/著	小学館	2003	915.6/ヤマ	
戦中派虫けら日記	山田風太郎/著	未知谷	1994	915.6/ヤマ	
風山房風呂焚き唄	山田風太郎/著	筑摩書房	2008	914.6/ヤマ	
列外の奇才 山田風太郎	角川書店編集部/編	角川書店	2010	910.268/ヤマ	
眼中の悪魔	山田風太郎/著	光文社	2001	913.6/ヤマ	
天国荘奇譚	山田風太郎/著	広済堂出版	1996	913.6/ヤマ	
十三の階段	山田風太郎/著	出版芸術社	2003	913.6/ヤマ/3	
悪霊の郡	山田風太郎/著	出版芸術社	2000	913.6/ヤマ	
ミステリー総合病院	山田風太郎/著	光文社	1992	913.68/ミ	

◆中島河太郎

シャーロック・ホームズのライヴァルたち	中島河太郎/著	パシフィカ	1979	930.2/シ	
日本推理作家協会賞受賞作全集 20 推理小説展望	中島河太郎/著	双葉社	1995	913.68/ニ/2	
日本推理小説史 第1巻	中島河太郎/著	東京創元社	1993	910.26/ナ/1	
日本推理小説史 第2巻	中島河太郎/著	東京創元社	1994	910.26/ナ/2	
日本推理小説史 第3巻	中島河太郎/著	東京創元社	1996	910.26/ナ/3	
君らの魂を悪魔に売りつけよ 改版	中島河太郎/編	角川書店	2000	913.68/キ	
幻想文学講義	東雅夫/編	国書刊行会	2012	904/ゲ	
犯罪展示会	日本推理作家協会/編	光文社	1980	913.6/ハン	
創元推理 17 ぼくらの愛した二十面相		東京創元社	1997	918.6ソ/17	
世界の推理小説・総解説	中島河太郎/編	自由国民社	1985	903/セ	

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	禁帯
----	-----	-----	-----	------	----

◆岡田鯨彦

岡田鯨彦名作選 噴火口上の殺人	岡田鯨彦/著	河出書房新社	2001	913.6/オカ	
薫大将と匂の宮	岡田鯨彦/著	国書刊行会	1993	913.6/オカ	
「探偵倶楽部」傑作選	ミステリー文学資料館/編	光文社	2003	913.68/タ	

◆千代有三

千代有三探偵小説選 1	千代有三/著	論創社	2015	913.6/チヨ/1	
千代有三探偵小説選 2	千代有三/著	論創社	2015	913.6/チヨ/2	
探偵くらぶ【中】本格編	日本推理作家協会/編	光文社	1997	913.68/タ/2	

◆樫八郎

探偵作家くらぶ【下】浪漫編	日本推理作家協会/編	光文社	1997	913.68/タ/3	
探偵作家クラブ会報 1号-50号	日本推理作家協会/監修	柏書房	1990	910.26/タ	
探偵作家クラブ会報 101号-145号	日本推理作家協会/監修	柏書房	1991	910.26/タ	
探偵作家クラブ会報 146号-185号	日本推理作家協会/監修	柏書房	1991	910.26/タ	

◆大坪砂男

軽井沢ミステリー傑作選	土屋隆夫/ほか著	河出書房新社	1986	913.68/カ	
宝石傑作選集 ハードボイルドSF編 天球を翔ける	中島河太郎/編	角川書店	1979	913.68/ホ/5	
ミステリーの愉しみ1 奇想の森	鮎川鐵也/ほか編	立風書房	1991	913.68/ミ/1	
日本推理作家協会受賞作全集 2 短編集	大坪砂男/ほか著	双葉社	1995	913.68/ニ	

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	禁帯
----	-----	-----	-----	------	----

◆三島由紀夫

若きサムライのために	三島由紀夫	文春文庫	1996	914.6/ミシ	
女神 改版	三島由紀夫	新潮社	2002	913.6/ミシ	
熱帯樹	三島由紀夫	新潮社	1986	912.6/ミシ	
鹿鳴館	三島由紀夫	新潮社	1984	912.6/ミシ	
美德のよろめき	三島由紀夫	新潮社	1990	913.6/ミシ	
純白の夜 改版	三島由紀夫	角川書店	2009	913.6/ミシ	
午後の曳航	三島由紀夫	新潮文庫	1963	913.6/ミシ	
芸術断想	三島由紀夫	筑摩書房	1995	914.6/ミシ	
私の遍歴時代	三島由紀夫	筑摩書房	1995	914.6/ミシ	
反貞女大学	三島由紀夫	筑摩書房	1994	914.6/ミシ	

◆山名文夫

山名文夫のグラフィックデザイン	山名文夫/作	ピエ・ブックス	2004	727.0/ヤ	
グラフィックデザインの世記	グラフィックデザイン 世記の編集委員会/編	美術出版社	2008	727.0/グ	
戦争と広告	馬場マコト	白水社	2010	674.2/バ	
広告のデザイン	ペン編集部/編	阪急コミュニケーションズ	2010	674.3/コ	
資生堂という文化装置 1872-1945	和田 博文	岩波書店	2011	576.7/ワ	

◆田中 友幸

ゴジラ来襲!	坂田由人/ほか著	ロングセラーズ	1998	778.21/サ	
ニッポン・ゴジラ黄金伝説	宝田明/著	扶桑社	1998	778.21/タ	
初代ゴジラ研究読本	—	洋泉社	2014	778.21/シ	
神(ゴジラ)を放った男	田中文雄/著	キネマ旬報	1993	778.21/タ	

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	禁帯
グットモーニング、ゴジラ 監督 本田猪四郎と撮影所の時代	樋口尚文/著	筑摩書房	1992	778.21/ホ	
本多猪四郎「ゴジラ」とわが映画人生	本多猪四郎/著	実業之日本社	1994	778.2/ホ	
本多猪四郎の映画史	小林淳/著	アルファベータブックス	2015	778.21/ホ	
ゴジラ大辞典	野村宏平/編	笠倉出版社	2004	778.21/ゴ	

◆竹内博

特技監督円谷英二写真集	竹内博/編	朝日ソノラマ	1993	778.21/ツ	
本多猪四郎 全仕事	竹内博/編	朝日ソノラマ	2000	778.21/ホ	
東宝特撮怪獣映画 未公開写真集	竹内博/編	朝日ソノラマ	2002	778.21/ト	
東宝特撮怪獣映画大艦	竹内博/編	朝日ソノラマ	1989	大型/778.2/ト	

◆その他 参考文献

日本探偵小説事典	江戸川乱歩/著	河出書房新社	1996	R910.26/エ	
(製本)アサヒグラフ 昭和25年【上】	—	朝日新聞社	—	05アサ/50/1-6	
現代短歌全集 第8巻	—	筑摩書房	1980	911.16ゲ/8	
探偵小説五十年	横溝正史/著	講談社	1977	914.6/ヨコ	
乱歩・正史・風太郎	高木彬光/著	出版芸術社	2009	910.268/タカ	
pen 2014/07/15	—	阪急コミュニケーションズ	2014	59	
探偵雑誌目次総覧	山前譲/編	日外アソシエーツ	2009	R903.1/タ	禁
幻の探偵作家を求めて	鮎川哲也/著	晶文社	1985	910.26/ア	
円谷英二の映像世界	山本真吾/編	実業之日本社	1983	778.4/ツ	
なかのの地名とその伝承	中野文化センター郷土史料室/編	中野区教育委員会	1985	M21/A	
大和町うるわし	大和地域歴史編纂委員会/編	大和区民活動センター	2015	M25/A	
ゴジラとアメリカの半世紀	ウィリアム・M・ツツイ/著	中央公論新社	2005	778.21/ツ	

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	禁帯
恐竜文学大全	東雅夫/編	河出書房新社	1998	918.6/キ	
芥川賞全集 4	—	文藝春秋	1982	913.68/ア/4	
鴉白書	渡辺 啓助	東京創元社	1991	914.6/ワタ	
(製本)文藝春秋 1990年 7～8月	—	文藝春秋	—	05ブン/90/7-8	
日本読書新聞 第6巻 472号-573号	—	日本出版協会	1987	071/ニ/6	
幻影城 1975年5月号	—	絃映社	1975	910.26/カ	禁
幻想文学 39	—	幻想文学出版局	1993	910.268/カヤ	禁

資料協力

中野区 政策室広報分野

一般財団法人 光文文化財団ミステリー文学資料館

ご親族の方々

中野区立中央図書館企画 第12回中野区ゆかりの著作者紹介展示

異彩の作家 香山滋～古代・浪漫・奇譚～

発行年月日 2016年1月28日

編集・発行 中野区立中央図書館

印刷番号 27指中教中第344号

所在地 〒164-0001 東京都中野区中野2丁目9番7号

TEL 03-5340-5070 FAX 03-5340-5090



中野区立図書館

<http://www3.city.tokyo-nakano.lg.jp/tosho/>